

小精雜識

大正十三年一月起集

特別  
14  
1919  
359



小物雜識一

大正十三年一月起筆



○開と任せし圖を過り十の計りも二十餘種を得た。其後  
回る拂巻の折柄もも名辨珍重中丸中巾のキ入の  
此のときあつたか、此物あつた若し後なるは、此家とせ  
ビツテ出させしものあつた。價は尖前と二割も高か  
かある、今五六種を存す。

一 地球全圖航路

一冊

實政癸丑二月司馬江漢の刻したるものあり  
り、此書は、大槪船隻の行方、此書は

地球回を成行し、さらき更々、南球を仰見  
し、経緯を、や日月蝕や天体の回轉を、と  
説いたる、冬玉の人種を、のち七説いたる、  
幻解する、といふ、あるが、これ、コンナ有物の  
刻本の如き、も、さうふべき、といふ、そこ、  
に、  
がある、此の原本と、今と、稀釈の、いふ、ある

・黙雷集

三冊

黙雷を錦備あを著、りし、天隱龍海  
の、う、い、歌、山の、高、僧、を、著、錦備あを著  
より、流布し、といふ、が、此、僧、の、伝、を、世、の、中、に、  
傳、い、ら、る、い、近年、五、山の、高、僧、の、集、を、出、し、  
此、の、あ、る、が、此、の、龍、海、の、記、を、復、し、て、あ

の黙雷集が、キ、の、入、ら、う、う、つ、り、の、と、な、く、る、此  
の、を、元、禄、三、年、に、刊、行、さ、し、て、あ、る、巻、首、に、  
高、僧、の、序、が、あ、る、詩、も、十、二、と、お、ち、り、い  
普通の、僧、の、佛、法、具、い、詩、と、選、を、異、し、て、あ、る、  
と、い、ふ、  
せん、七、説、の、稀、釈、の、い、ふ、あ、る、

一 船方往来

一冊




往来もの、と、あ、る、あ、る、と、い、ふ、二、冊、つ、て、出、来、て、あ、る、が  
此、の、を、其、に、稀、釈、い、ふ、あ、る、巻、頭、に、大、漁、の、目、録、を、  
二、字、が、あ、り、て、本、又、ら、書、き、道、往、来、の、お、き、方、と、な  
つ、て、あ、る、一、冊、船、地、引、信、の、船、方、の、心、持、が、考、え、  
ら、れ、て、あ、る、船、の、各、部、の、名、稱、や、船、具、の、名、稱、を、い、  
ハ、其、道、の、い、ふ、あ、る、を、知、ら、ぬ、こ、と、い、う、多、く、漁

業目の巻考として大切なる材料である巻  
末、ハ手伝主の名や北引伝主の名、多く解  
されてある。江場土仁壽寺巻板とあるが、勝浦  
の伝主の花七とて長らく出放元の見事とお  
うを推測する。

一 高村画譜


一冊

抱一の画譜を酌して珠とすまふ足らぬといふ所有  
流布するものも多し、後刷りして彩色したし  
こゝろ、此布の表紙又色紙の鹿、抱一目  
葉ハ、萬象印を師と題し、脣麦者居  
巻とある。これか即ち初稿本の流布とす。此  
の流布に彩色がより後刷り較べると雪泥畫

まゝさす差がある。画譜は、初稿本を考ふ所  
以り、着るもの原意を、 欠いた所もあると云  
ふも、まゝさす。初稿本の價の安い理由も、こゝに  
ある。此、脣麦者居巻を和名居のまゝか、 此  
巻のまゝ、麦飯を名つて、初稿本を流し、此巻は  
此の巻であること、いつかや随巻の巻、 此である

一 仁王門巻句合

一冊

仁王門の一枚摺りをも多く集めて一冊に綴つた  
ものも、枚数多く寄つてゐる。摺柳式の本巻り  
多く人の知る所であるが、一枚の句と人名を一行  
の細者し、上部に脣節と以り、名點をつけ、一枚三  
枚と刷つて社中、目分、比のが、 枚もある。

とある、此書は収めしあるの成の年のある日、川柳と錦江が評をしてある、句の数の多き位あるのありう

一 其 集

五冊

此書享保二十一年京都に於て刊行す所にして漢法の医業より著者の支那の吳門の周岐来と云ふ人をして撰者の稱あり、此八回聘の應し去後の壽館にやとり後譯正舟柳氏の名を居久吾志をも治泰し顯る效驗ありしこと法家の序文にあり、此書に即ち吾志者に施し給て漢法の實驗を経し給りてなる即此書志の表を以て子細に醫論と叙す、吾母醫書史の資料と云ふ事と云ふ也

一 うすのき物語

二冊

友人と贈るもの也、厚紙本寸珍巻入、余多くの寸珍本を集め其数千二万部を出ん、此書を得ては始めし也、其寸尺正なる物語の定尺にあり且つ後刻もあつた也、右巻をすし、伊勢物語に此版とヤ、似たりあり、世々く同じ版刊行のありん

一 浮世親仁形集

五冊

八文字屋枕巻の一也、此種の本を今も尚希観る、執向古文章も直也、六右衛門の世お大徳を、此親の資料と云ふ事と云ふ

一 益村七部集

二冊

此本小形を往年訪り得しと云ふ所は近年長と  
稀なるを 雷火前終に得る能くせしむか此後印  
つて得るを尋るる 價は旧也

一 和名類聚校語異體字辨

一冊

此書藏書的に附し言を代へるもの 板書の  
和名類聚校語十冊の各冊の終に考語附し  
あるを何故か印刷の事故の所之れを省き  
せしむ此書は木村正辞の刻本に依り字し且つ  
校訂し得るもの大槻文彦の刊行廿二ある  
ハ、巻尾文彦の仕書あり

一 華苑圖考

一帖

此書も原稿本あり色彩真に遠うつて用を

為るが災前得る能くせしむか印つて災後得る

○ 瑣々録教則

尊因親王の古えんは後夏帳の事い前書

に録し此の後夏と云ふは夏期か僧の研究のシーズンに  
も成るる著後を上下し字也。○ 續余の東慶寺と  
夫婦間の波瀾を記し婦人の逃げこみ体とて此の  
この是を授するに良人のあまのり得るしと云ふは近利  
附近に満徳寺といふ寺も張尼寺といふ寺の印あり  
とい初をづく所也此寺も徳川家の系統に属する婦人の任職  
するし為の法律の力の権力ありしと云ふ。○ 帯し深  
川に舟屋と云ふ書も料理あり相部屋と一瞬は納  
め得る見ゆしと云ふ。不々一は望陀欄と類しと云

此頃解のハらひをボーダラと云ひし言客セ切るを編  
と附したるを事〇福澤翁の修身要領を其の自筆  
の傍一版掲しし中央の翁の肖像を納めたりやその時  
より二十則むらう各別五六行位にて何れも獨立自筆の  
要を後きりてその頃迄三十三年一版を福澤翁と署  
名あり其文意義疏を其を基金募集用之を刷り謝  
礼之れをせしむること、こんど就て思ひ記すこと大隈元侯  
と翁との福澤翁とせし道徳の大本を立つるのを翁を論せし  
しことあり、翁の勤快を以て教育勸諭を出版し其の  
も此一家言ありしを翁の著しと〇埃及の建案に属する柱  
の模型を尖前玩具店に賣りたりとありし一二将心  
ありしことあり、此の柱を以て四凸差の彫刻ありし人々就

翁の款と彫り又彩色を施しあり、翁のト、テンポ  
と云ふ、此の柱を以て翁の著しと、此頃性善の研究者を論  
ずるにボーンと四凸根のこととあり、然るに此柱女性像の  
宗符も淵深ししと短考を表徴するものありとあり、  
翁の著し〇大隈翁の遺遠念伝といふ者も今、得難い  
ものである此頃得て後ある、福澤翁の二十の時、友人の五十年  
とあり遺遠の念を憶しし、乃ち翁の記をその時のことを記ししもの  
とあり、翁の著し大隈の著しとあり、然るに此の著しと  
手より入ん此の日の友人和蘭書士が帝大の圖書部長を辭  
し、此の著し、著しを以て圖書部長を辭し、自分と同人  
と代表して一場の演説を以てし、この著し、材料を  
あり、この著し、席上ニこの著し、演説し、この著し、引出、圖書

彼ノ業の而倒るることや他人に甚るの如きものことと云はれざる  
然らば南學を心づくは甚るしとのを以てのみ、後後五十年は  
より漸やく文明の世と云ふに、ニライの演説は最初の日を  
、東比時と云ふが真誠心高くも危殆にありしを以て、今  
ハのよりよりと大口をあげて自由ニ情を呼ばう出来る  
と云ふてあるが、固者彼協會を以て初の新田の玉川亭に開  
いた演説は、當時といふ物も、開きぬるも、あるは、  
あつたか、今も今も固者彼う美人と列する、出来しヤツト  
のうく、よりと未だ、下は、幾かの後五十年と云ふ、  
併し、いふも、固者彼のこと、一般に理解するもの、  
も七理解するもの、随つて三十五年の如く、  
田原の切替り世間、  
約し、  
此點、

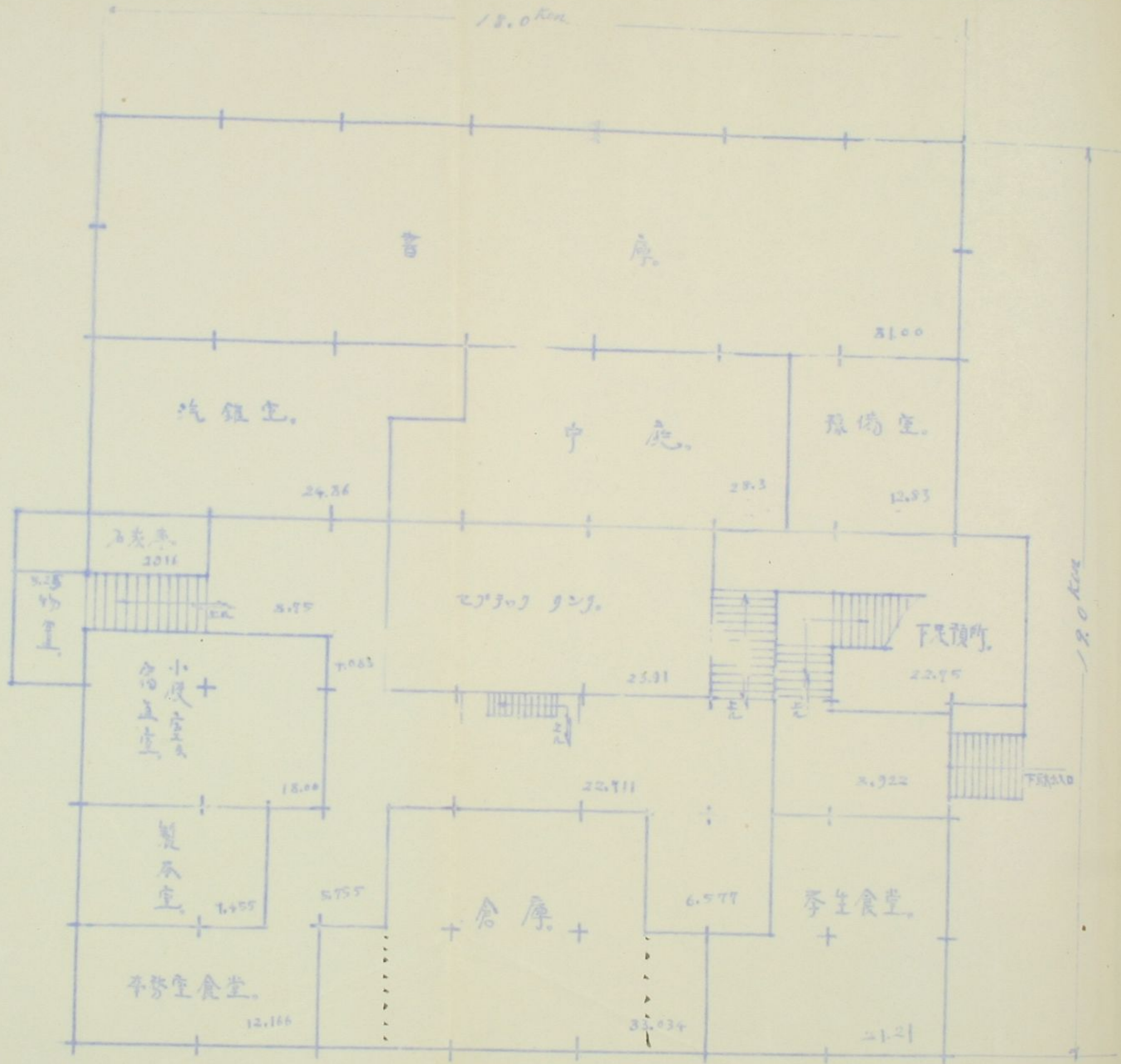
學が認められ、  
も、  
と、  
こと、  
進、  
行、  
模、  
尾、  
階、  
ヤ、  
う、



思ひつゝの風は、らうらうと音ふべきである。尚ほすべし。原物  
がカニナカうけが、粗扶むまのてある。その根を摸してある。如  
く風流がある。日本の湯本細工を、釣うま音流に出  
来てゐる。かゝる、執味がある。いつか湯本細工を、見る毎に  
改善を要する。と氣がつくが、此の模型を、見せし。原物の  
感を、添ふ。これ。根は、日本橋のバラックを見物を出し、けし。バラック  
ある。と。露店に、外面紙幣がある。露店や、紙幣である。と  
の二束三文のもの。ひらう。と。五葉田の紙幣が、在田の傳う付  
いて。み。紙幣の、印刷や、意匠の、標を、と。て。而。七  
ろく。思ひ。と。五。六。枚。將。つ。に。皆。十。札。を。あ。る。か。様。の。お。紙。の  
の。左。下。に。下。り。海。し。て。あ。る。七。の。ひ。あ。る。

八  
九  
二  
一

早稲田大學紀念圖書館設計畫案



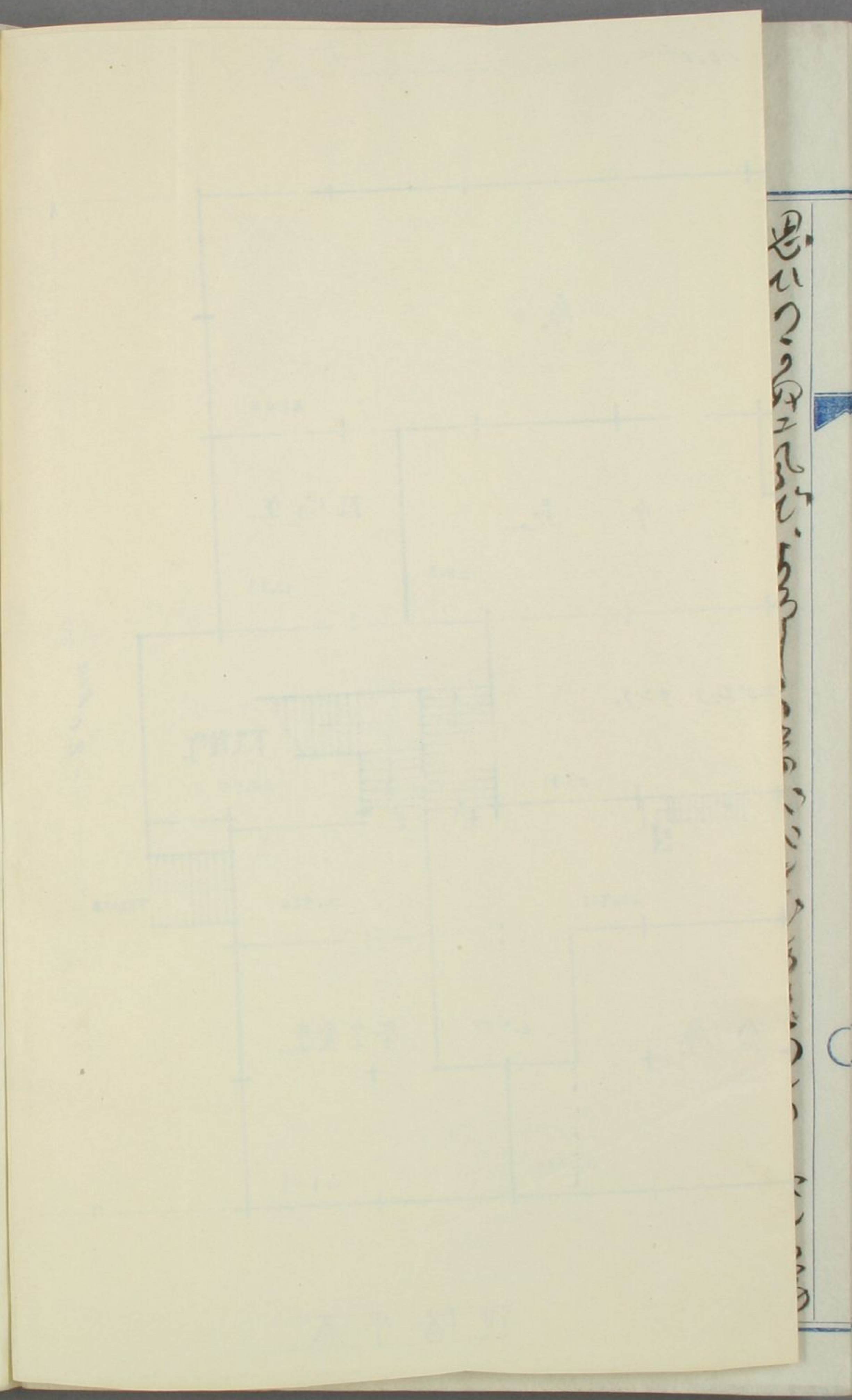
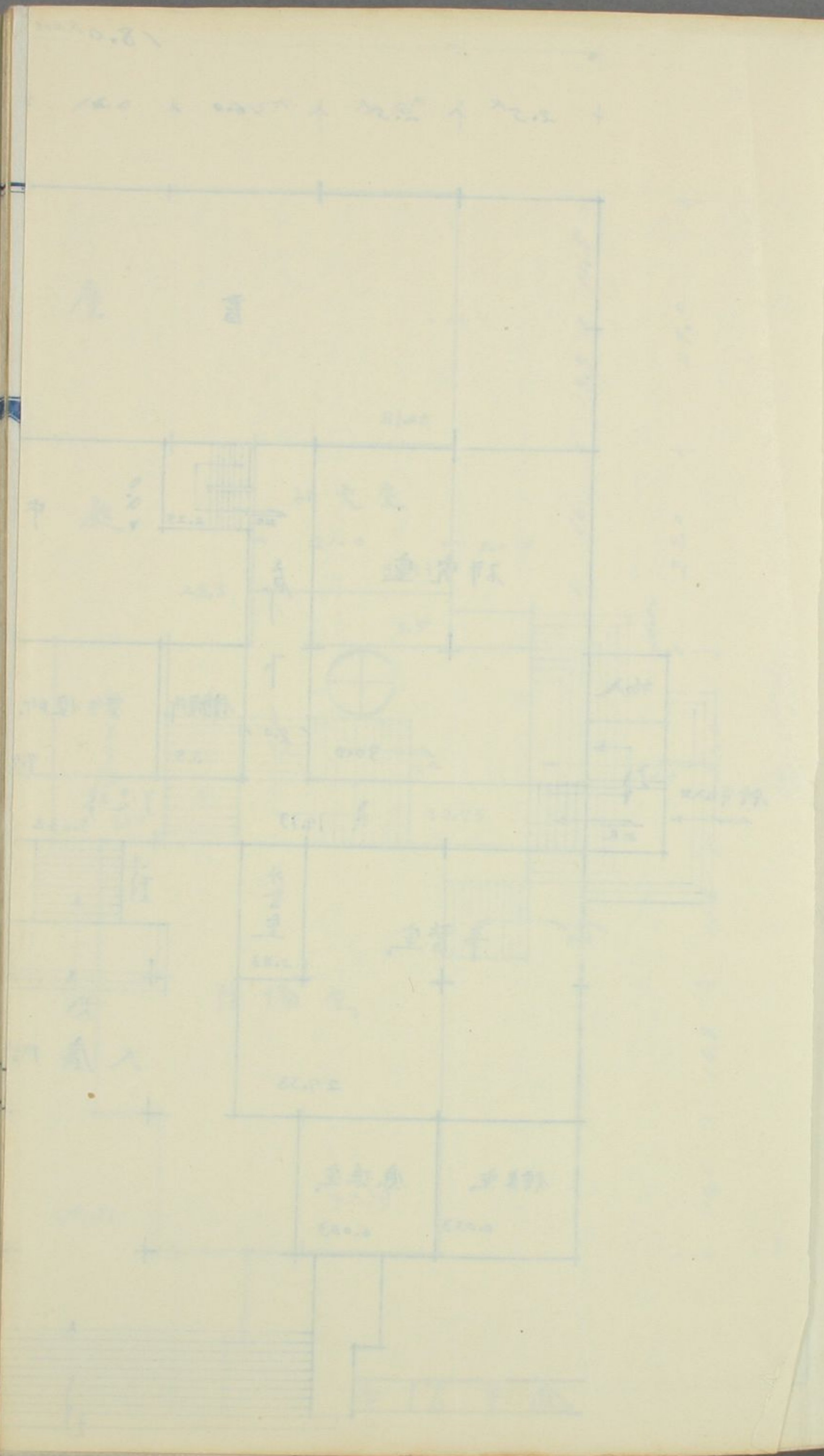
平野食堂

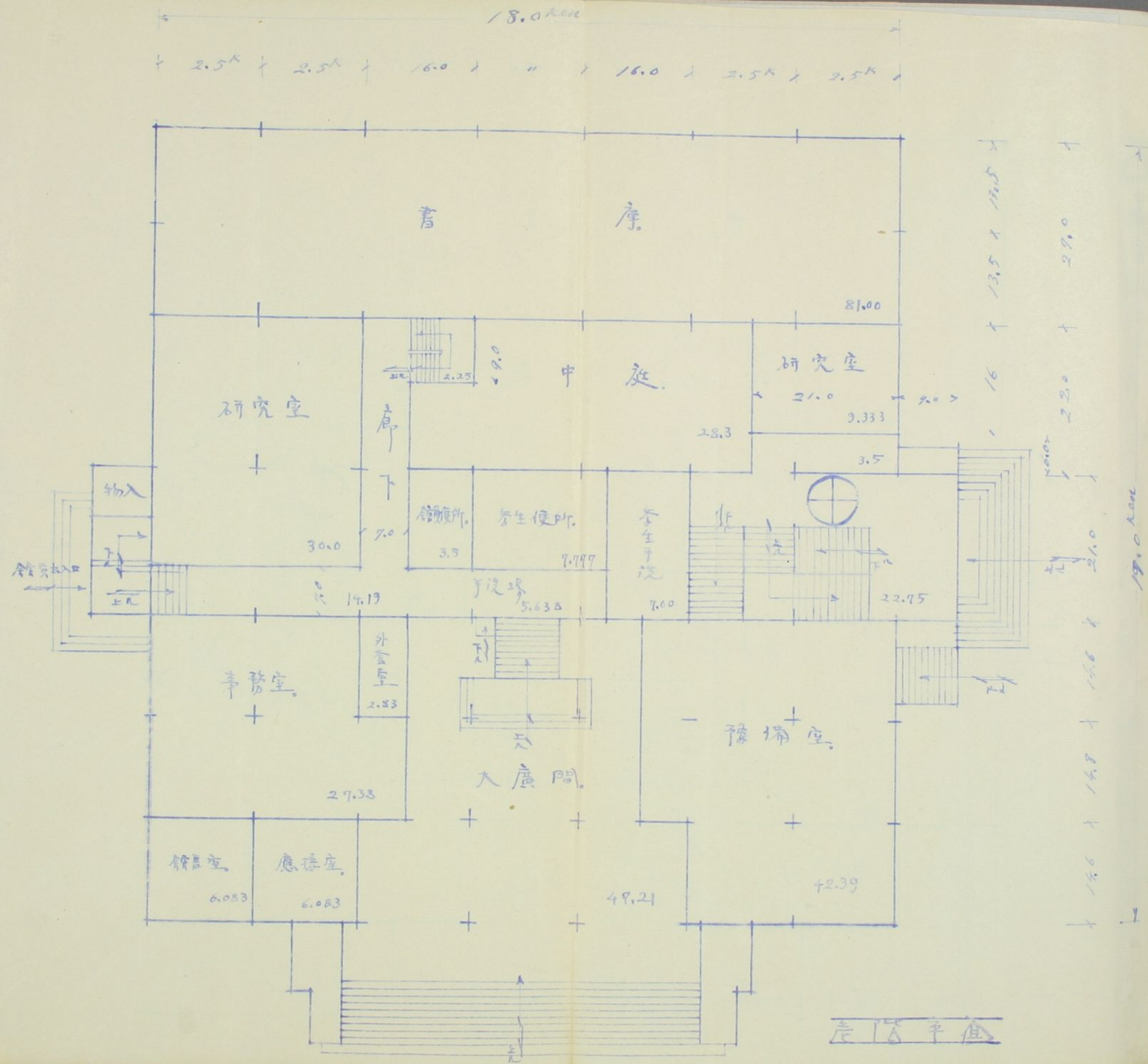
地階坪数  
一階坪数  
二階坪数

本館	多層	多層	多層
81.00	8.75	7.063	22.75
81.00	18.00	6.577	21.21
81.00	12.166	35.034	

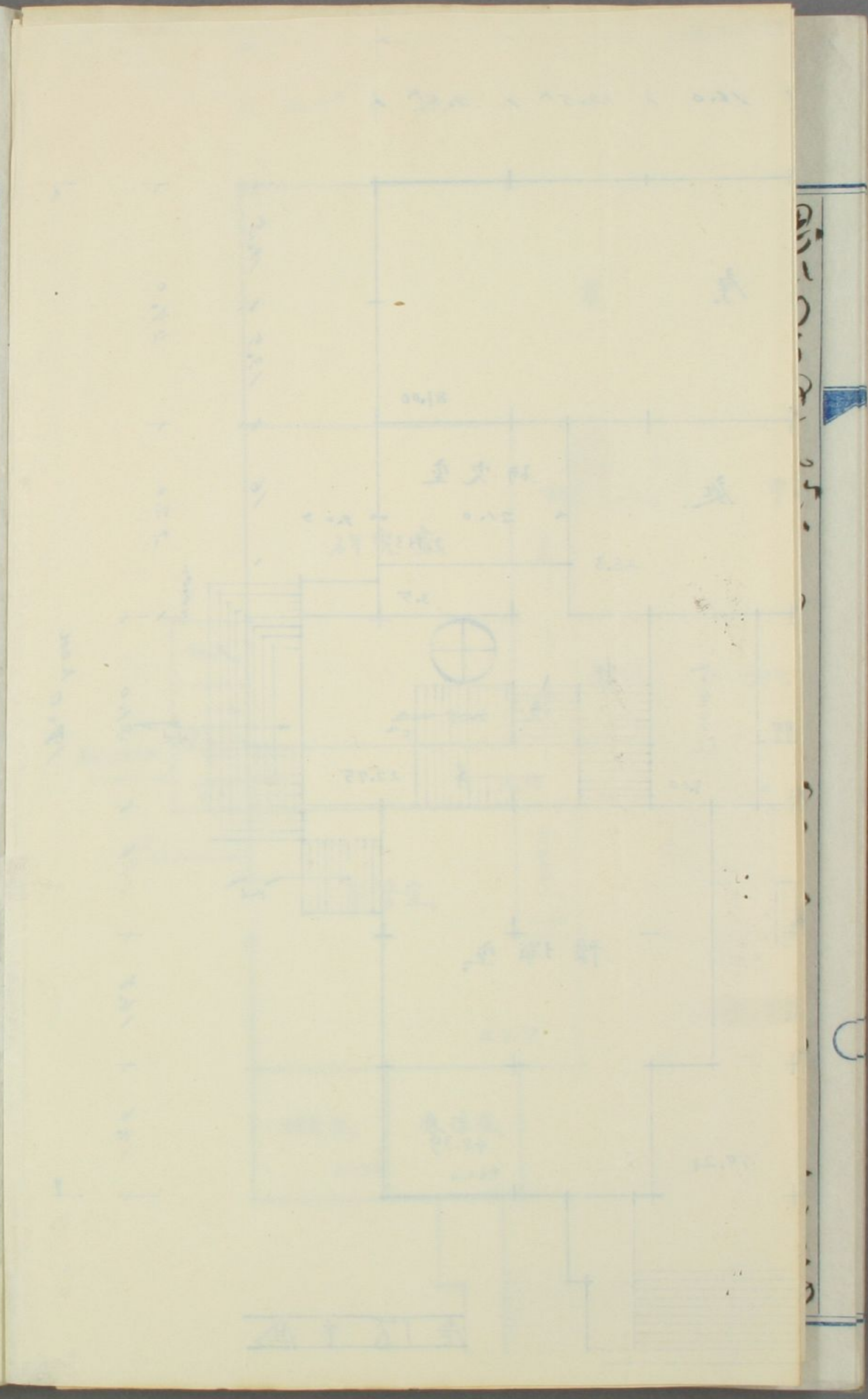
1923.12.24.

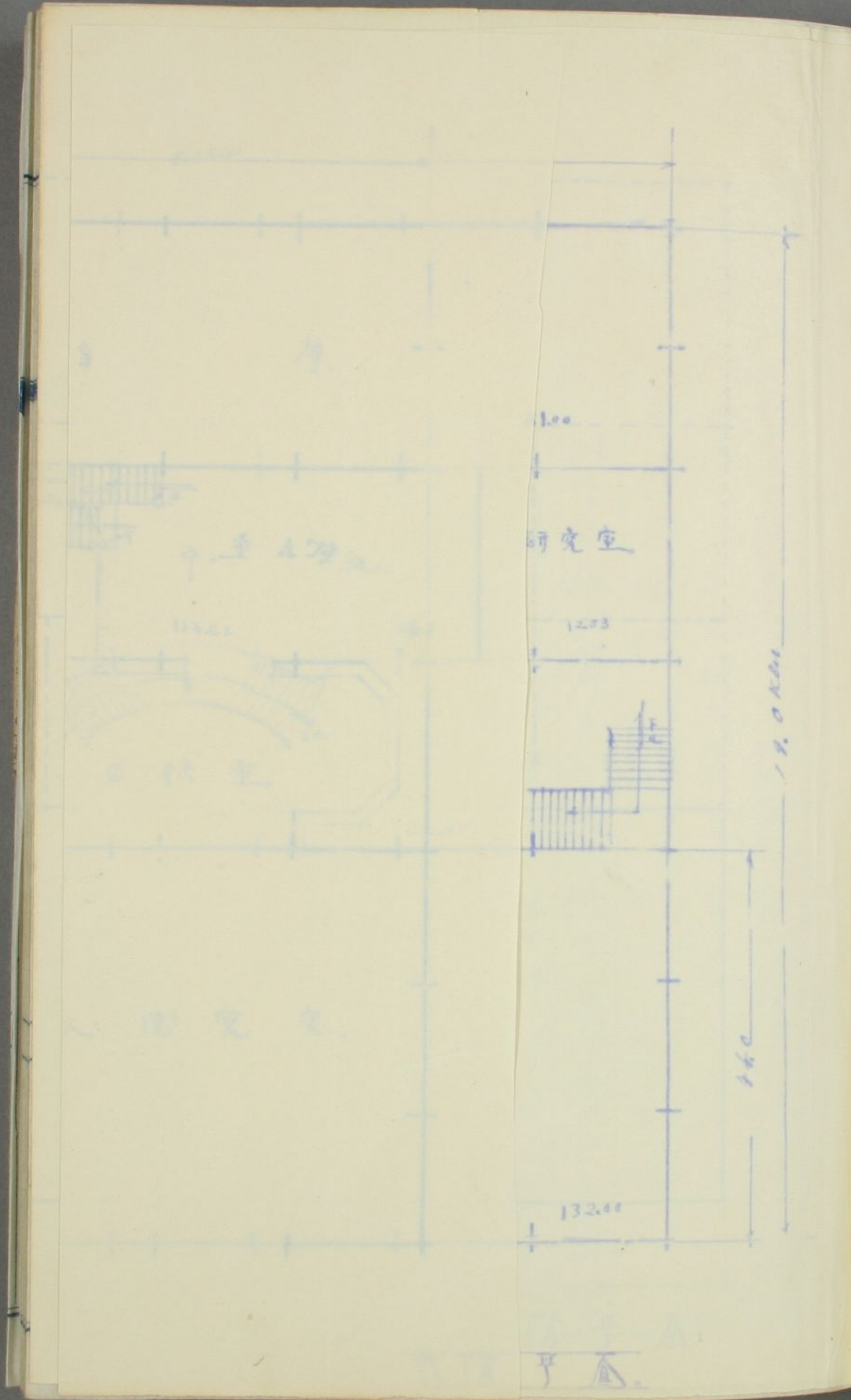
の二東三文のよのひうらに五葉山の御幣が在田の傳の付  
いしめ比、獨りの御幣が印刷や意匠の標をとりて両者  
ろく思つて五六枚將つて、皆十夫をあらわ、獨りの御幣が  
の在屋此下より海しとわすちのひあす





○ 夏、秋の二時、四面四拍り、早大圓者、後の後射の如  
 圓である。即位大典の如く、心と頭を帯し、いくれも  
 心つたものが、皆徒勞なり。此、唐吳夔の如く、  
 滿向か、如きもある。此、視摸七宿、三十五宿、  
 田種、  
 略、全格、  
 かの、  
 りん、  
 を改、  
 跋、  
 之、  
 新、  
 川、  
 左、  
 文、  
 科、  
 講、  
 義、  
 并、  
 一、

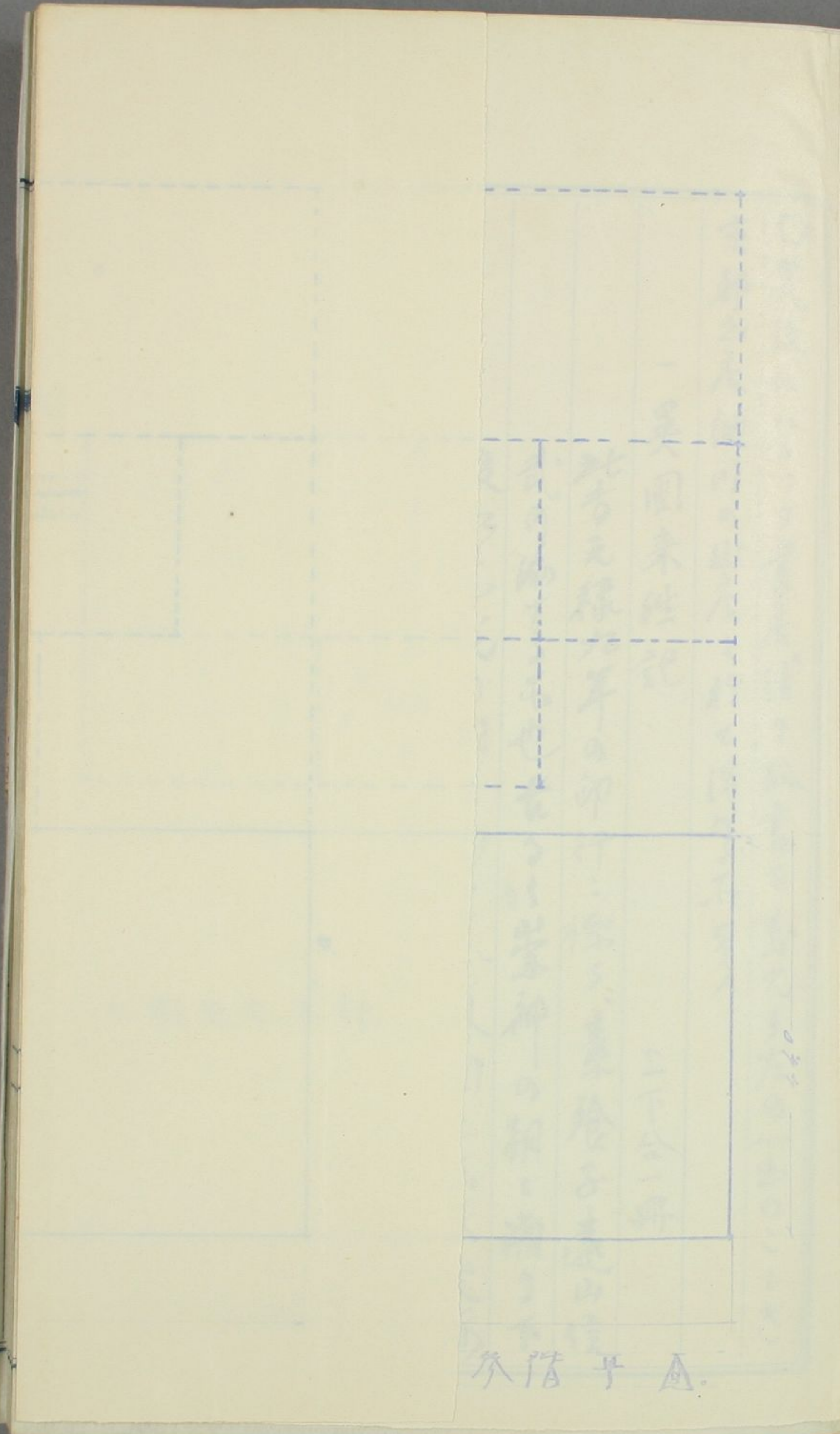
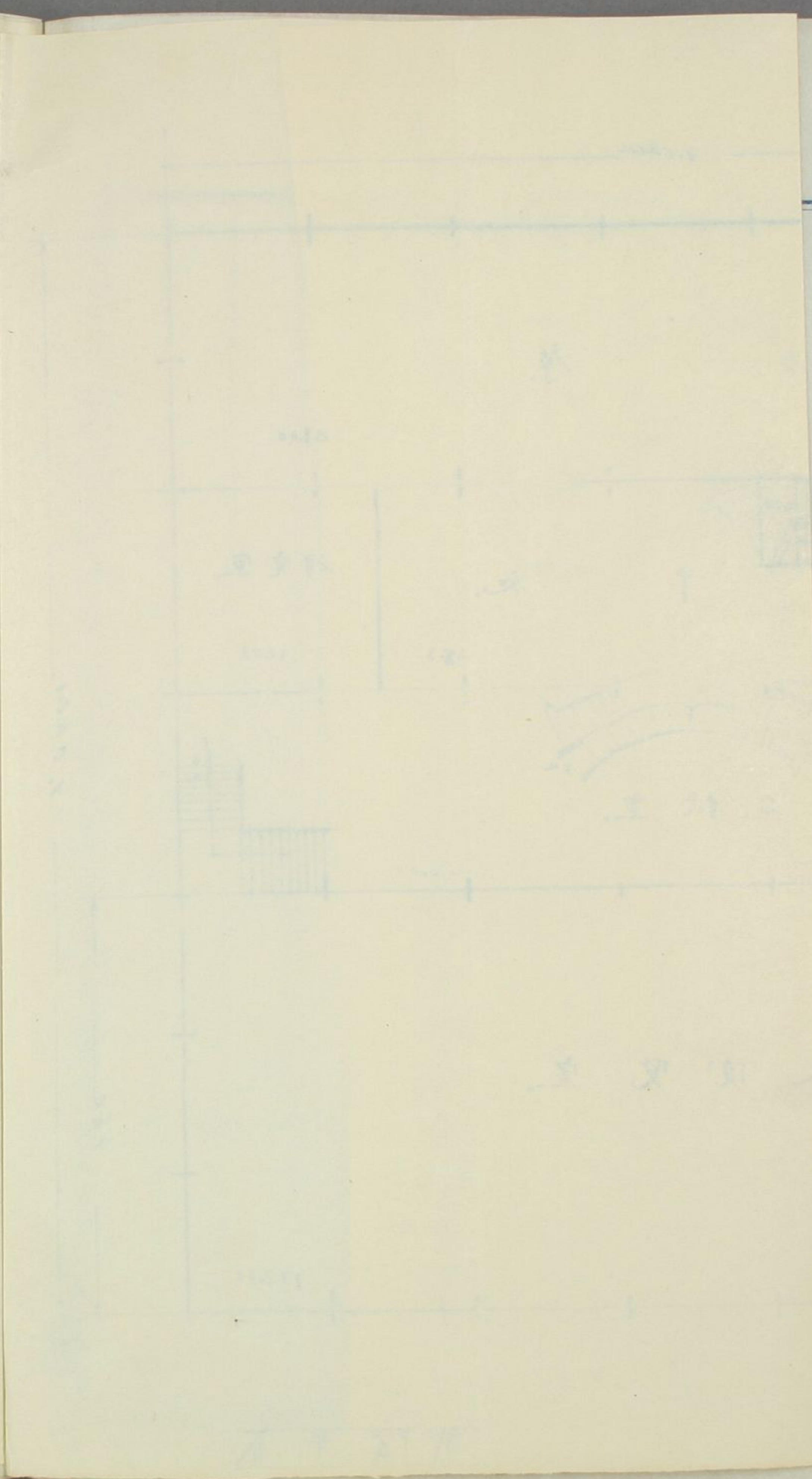




多生松市土地、移入し、三二日位地を定り、管中。

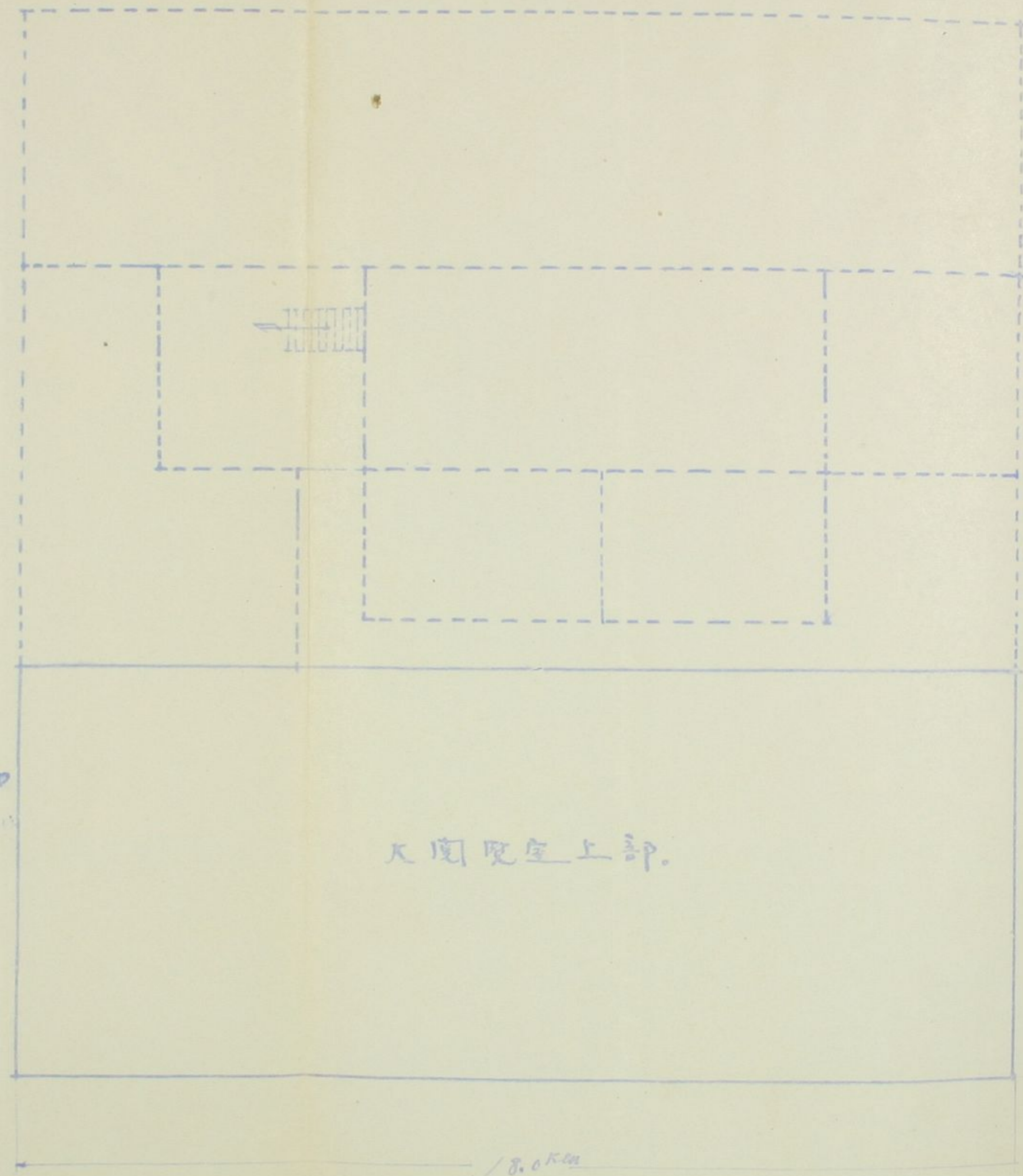


寄生松布と他、移し、その位置を定むる事也。



分階子△





大園院定上部

18.0 Km

外階平△

寺生控布土地、移し、三日月後地と定すの程也

多生松石を他に移し、その下に定石の

○災後のバラック書店に往々珍書を見たり左の一冊のこと也  
京都本店細川の出店に於て得ざる

一 異回来経記

上下合一冊

此書元禄九年の印行に係る、素飡子遠山信  
武の編する不也古くは崇神の朝に溯り下  
後水尾院の朝に及ぶ外四と去来文海  
の事歴を編す、異稱日本伝と似たるもの  
も、これと極めて同様の考案と使ふる  
巻首は貞享丙寅松浦黙成の序あり  
巻尾に紀州の雲石中宋本の跋あり  
極めて稀観の書なり、母前年京都大蔵  
覆本を成りしことあり、其原本を細川不

卷の北本也、價三十五圓也

その他に林有、あつても一二冊す、きよのあつ

一 星名考

一冊

尾州山本武平の著す、延享元年京師  
に刊行、漢文を星名を解むに就  
て致し、天文学の一冊也、卷首星名  
の布施准案の序あり

一 猿橋碑銘

一冊

北本寛曆五年甲の年猿橋の為り、建  
碑文を目錄し、因を収め、又往家の題詠を収  
め、白字法帖体にて文七首あり、高橋の名家  
の筆に成る、即ち碑銘、錦江鳴鳳師撰

文藝類、漢風因碑陰文、北碑を建  
石川東侯、題詠の内高橋の文あり、玄  
の者あり、深の宛和の名家の筆に成る、  
没の治あり、龍門劉准物の書後、又熊  
耳の書後等あり、此等猿橋と題する、好資料  
なるものあり、亦一部の法書と見ると得  
べし

○四幅亦寸珍者画一二を得し、不精屋の架中、一冊

一 山風氣波光帖

一帖

菅原白龍の画冊、巻首、山風氣波光の自題  
あり、依つて帖の署に、山風氣波光の  
山名十二枚、余既にもく、近世名流の画冊を

蕙花、牙心粉屋の定尺：高ぶ、而七、畫白紙  
の葉を糊きし、之れを得て湯を透すをゆ  
り、白龍の画一種の風格あり、余垣、之れを  
喜ぶ、北西帳亦彼れ、特名を別揮、一  
畫、域、

一 源氏五十四帖

寸論 一卷

華名、和名、をいへば、依、傳、を、画、紙、愛、ま、し、五  
十四帖、すべし、人物を缺き、各帖の表、後、は、く、き、り  
を描く、鳥の子紙を用ひ、卷の縦尺、約、二、寸、許  
松子、<sup>紙</sup>、屋の定尺、(高)あり

〇左の一、五、七、を、と、給、本、を、

一 佛國考証

一冊

北有尾張の朝夷原生の著、いす、不、文、化、十、一、年、の、刊  
行、に、依、り、天、皇、の、地、誌、を、考、証、し、る、もの、を、挿、圖、あり  
たり、松子、天、皇、と、秘、魯、國、を、い、ふ、此、を、採、り、す、不、意  
像、七、冊、あり、其、中、一、冊、は、味、丹、也、大、体、西、洋、の  
用、を、い、は、る、冬、雪、し、る、もの、を、此、次、の、出、し、し、い、ま、お  
ふ、正、し、き、い、の、ま、り、若、者、の、夢、田、也、之、し、北、の、書  
若、二、佛、國、圖、考、二、冊、あり、一、冊、は、卷、尾、尾、高、也、摺  
二、あり、之、を、刊、行、せ、ん、し、や、重、也、を、い、ふ、也

〇舊、時、通、事、御、所、開、院、式、に、依、り、攝、政、殿、下、の、函、簿、に  
裝、飾、し、る、もの、あり、鏡、縁、を、飾、り、し、の、自、動、車、の、窓、を、改  
り、し、る、七、章、に、佛、與、新、ら、あ、り、せ、ん、と、い、ふ、定、に、意、ぶ、へ、く

賀すべし、此等が我國更に例のなき大なる教育の件に、内閣を  
これら為め依りて職を乞ふ、犯人の當りて早大の高等  
予院に之を籍を考せし、不良者年々、其父を改むる  
ニ席を乞ふ者、識者也、の事可也の主義者、その人の  
未だ洋に居る者、たゞ日、おらふものと、西洋の事情を  
ある者、予院の念のあり、報し、知し、そのこと

拜啓

今固の事、変化は試に恐懼の極と存候難波大助は  
大正八年、三月山口縣為城中學校四年修了同  
十年四月本學院に入學し同年内は缺席勝馬  
から通學致し居り候へ共大正十二年に入りては  
全然缺席致し居候のみならず授業料も  
納附致さず從て三月の學年試験にも落第  
致し又原級編入届も提出致さず仍て六月一日附  
を以て除籍致したる次第に付左様御承知  
置願度なほ本人は從來本學院に有之候  
社會思想研究会にも關係無き者に有之候間  
此儀も併せて御含置被下度以上特に得責意  
候 敬具

大正十二年 末二月廿九日

第一早稻田高等學院

市島謙吉 殿

○歌麿の青い比雪の終りの世が銀世界を眺めて立つて  
 ゐる、そして真白の雪をのびた泣く泣くまのいと  
 頼み頼みを又せよ、まあ、倚架を雪にこと、何れも  
 茶の坪を舞あそぶかしくと云はせぬる、外人の工  
 二テ修をえし日本人の恥骨の自れを奪うる四民の  
 ことそのあゝ、如何なるものありあゝ、日本の家屋のま  
 築るも全く自れ主義とせよといふ、材料、しん、り  
 川木まきまきとせよと自れをまつてみる、如何の  
 一筋、七常の自れが自在の家の中へ流る人々の  
 ○英人の保守心何れも、就ちも氣長、望望や、家を  
 するも救世代を思ひて追々積りて、ある米田人の全  
 かん一巻、やるといふ、米人が英人の芝生の地を

詩のて美事かあとの感じ、どうせん、ハコンナと  
 下二川あたる、何んかそのこと、時、水を流つて延びる  
 刈り、時、口ローラをかける丈、どうせん、ハ  
 位も立て必しと流るる、と云ふ、ハ米人も一  
 廻ると、日本七、五米利加流、ハ金力本  
 び先、切を急ぐの勢がある  
 ○この雪に思ふ、物も、枝木、ハ老翁故也  
 くある、そのを喜ぶ者、日内の、其を、花  
 つ、土の、葉、葉、持、持、の、枝木、ハ  
 此の大書、ハ、大書、の、思、思、ハ、出、出、ハ、  
 集古書、ハ、二十、九、五、冊、此、枝木、五、千、六、百、七、枚  
 此外、古義、ハ、四、冊、信、洽、四、冊、葉、多、ハ、

八冊、常事為物解五冊、常事人抄三冊、常事の地詞  
解五冊、玉崎考一冊、古言譯名五冊、永言格三冊、雅  
言成法二冊、鐵囊二冊、言例總用一冊、舒言三轉例二冊  
用言、夏格例一冊、統詞一冊、合井四十六冊、此枚木三千  
〇三十一枚半、二、三、八、千、六、百、五、十、六、枚、半、と、多、く、數、多  
き枚木が、回者寮と隣り合ひ、その地物録の、此枚木を納  
め、やまゝとあつたのを、回者寮の、木籠む、まゝの、為り、又、回  
者寮の、まゝの、有、其、り、氣、分、附、か、ず、中、物、の、害  
災、心、い、い、と、く、破、損、し、て、危、る、ま、ら、う、と、自、為、の、工、兵、隊  
に、托、し、此、等、枚、木、が、丸、に、燔、彼、も、ん、と、し、此、刺、所、漸、や、  
回、者、寮、の、ま、ま、が、氣、分、の、さ、又、皇、の、降、多、敷、の、人、を、殺、し、ん  
ヤ、ツ、ト、雨、り、出、し、と、ま、出、し、と、ん、ん、此、等、枚、木、の、葉、も、

なり、心、ま、ま、喜、内、有、故、の、十、符、の、世、住、者、の、經、の、花、御、と、  
の、致、呼、也、體、幼、少、の、強、を、め、め、所、者、等、級、の、枚、木、を、  
し、何、の、も、を、ま、ま、ま、ま、を、得、と、と、云、六、此、等、の、枚、木、が、回、者、  
の、所、者、に、席、し、て、お、れ、を、は、初、め、ま、氣、分、の、く、の、お、あ、る、か、  
官、房、用、の、課、の、所、者、に、あ、つ、た、為、り、ま、ま、ま、ま、誠、心、に、仕  
事、の、と、し、お、れ、の、危、険、が、あ、つ、た、と、有、者、の、区、に、の、災  
難、に、お、れ、の、行、お、し、の、ま、ま、お、れ、の、ま、ま、ま、ま、  
〇、昔、木、の、内、に、哀、詞、の、あ、る、ま、ま、を、柳、を、お、し、あ、る、ま、ま、枚、木、を、  
お、し、お、れ、の、お、し、の、能、に、お、れ、の、哀、し、け、し、あ、る、か、ら、お、し、支、那、の、ま、ま、  
こ、い、お、れ、人、を、離、お、の、お、し、の、ま、ま、を、揚、柳、を、お、し、材、を、お、し、  
入、ら、ま、ま、柳、を、折、り、し、手、を、別、つ、時、に、お、し、こ、い、お、れ、  
こ、西洋、の、ま、ま、強、り、回、じ、く、哀、詞、あ、る、こ、い、お、れ、と、感、し、て、垂

柳をば英彦の *mesaping willows* と云ひ揚屋語り  
*Tranmerweide* といふ *Tranmer* の悲哀の歌に  
 ある。亡友横井時冬が古歌の思ひ慕とある事と  
 ドニナとのこと苦心して神の画家に托して書かざれば  
 ことある、とあり人今老る花に帰してあるが、この  
 花がウナタレテ 物思ふ秋もある、とつけば名と見  
 へる、又此の哀調を帯びるものと一とある  
 ○高橋時庵の画名を正記よりしてある者音者を知れ  
 本に、貞谷七人の画統をよるこぶちの比、此は時庵の  
 為馬也漫載と云ふ画論を得て現す、と云う  
 又秋かある、時庵の井洞の従つて、人比し、とあるけん  
 と名も、一と、河原の拘泥を、却て見どころか、一とある

かつら、いお、ある、北人、佐馬の、漫、の、坊、城、の、崎、の、文  
 化、二、年、の、生、ん、家、と、代、の、流、説、を、業、と、して、ある、伊、藤、を、  
 流、説、と、云、ふ、は、な、ら、ず、ある、か、是、れ、北、人、の、家、の、沖、野、忠  
 雄、と、い、ふ、二、名、士、が、北、人、の、姻、家、に、ある、と、云、ふ、こ、と、を、知  
 る、と、海、道、漫、載、中、の、一、信、に、記、し、た、り、  
 ○旧、臘、大、丸、の、七、打、入、を、記、し、た、り、ブリツキの、鑑、を、形  
 年、の、ま、つ、て、用、意、し、て、見、比、が、是、れ、を、物、知、意、の、畏、布、  
 業、子、に、お、し、る、も、美、る、事、は、且、つ、や、ア、味、を、存、し、て、ある、  
 引、札、に、記、し、た、り、と、書、つ、て、解、説、の、御、用、を、つ、と、見、由、緒  
 ある、松、前、庵、と、云、ふ、家、の、製、に、ある、こ、と、が、是、の、う、た、京  
 都、と、お、し、る、の、未、歴、の、ある、志、緒、が、多、い、が、江戸  
 の、こ、の、と、多、く、い、知、ら、ぬ、こ、ん、を、も、其、一、例、と、ある、た、ら、ぬ



ぬある一家が其の家の素性を語りてある  
 ○此年の霜災い多く貴座の園者の戒に比中する帝大園公  
 限の花の焼失したのとうくあり貴城のことに堪へては  
 しのひのここといひ橋年の旅をすや其の書花の二紙を  
 記して置いたが、此年未だ其の園を復協合旅徳の  
 館中初田崎士の記多か載つてある、其の檢めを御  
 来してあるから、爰に全文を載せしむることとすべし  
 ○ある人の逸事の中より、是のことありて  
 既に日用の具の無い多きを述べておいてある事あり  
 子とてとて産や鳥いといふ事ありて

行幸の節御用の昆布 其八

文右衛門代々御清所參問御用調進を相勤め帶刀を以  
 て奉仕するに諸役御免除あるのみならず臨時行幸非  
 常の御立退には供奉に加はる事殊に家の面目となし  
 たりき此の爲として常に非常鑑札壹枚箱釣弓張提灯  
 を下げ置きて時々御改めあり其代繼の節には文右衛  
 門を召させて禁裡御附役御膳頭御取次頭等諸役人列  
 席の面前に於て忠勤無二の誓詞血判を行なはしむる  
 こと尤も鄭重にして是併しながら毎晨の供御を調進  
 する輕からざる御役に參召する故にてありたりき故  
 機に臨みて行幸仰出ある時には水浴に身を淨め御獻  
 葉昆布御口祝昆布を納めたる唐櫃の先には祖先文右  
 衛門が尊ごき御筆にて賜はりしはつまへの小幟を  
 樹させ嚴重に守護して供奉に加はり御用を勤むること  
 累代の例にてありたり

宮内省御用所  
京都府釜座通竹屋町上ル  
松前屋  
廿九代  
小島文右衛門  
朝英

前々次第書の通元亨の比吉野山皇城へ昆布を奉りしを御用の始として二十九代六百八十餘年日御用相勤めし祖先の微忠いまだ御撰擇の朝恩に浴せず嗚呼尙明治維新御東行の後は折角の名蹟も次第に細煙こはなりぬ何卒御引立をすかりて願ふこなん

諸役御免除  
虫龍東市正  
東辻修理權亮  
渡邊隆成守  
小佐治石見守  
土山安藝守  
虫風豊後守  
渡邊河内守  
小島文右衛門

諸役御免除札の寫

小島文右衛門

非常御鑑札の寫  
渡邊隆成守  
土山安藝守  
虫風豊後守

論說及雜纂

東京帝國大學附屬圖書館の罹災に就いて

和田萬吉

今次の大變災によつて大は國家小は個人の損失した所を積算したら到底算術の數を以て表出し難いであらう。多くの人は物質的の損失は程無く取回せると事も無げに言ふかも知れぬが實際は頗る不容易で單に災前の舊態に復するのみならず之に將來漸進の活動力を添へようとするには特に帝都の人のみと謂はず舉國上下の大々の努力を要する。況や災禍の齎した精神的損害に至つては之を復舊し代償し充實するには非常の勇猛心を奮起しなければならぬが是には有識者多數の協力を待つことである。損害の件々を物質精神の兩方面に亘つて調べれば幾種幾様になるか分らぬが或一件にして兩方面を兼ねたものとして我が東京帝國大學の被害の如き其最も大なるもの

の二で其中にも圖書館の罹災は殊に近來の一大慘事と謂はれよう。されば學問研究上圖書並に圖書館の効用に深い趣味を有一人々は同大學の内外を問はず該館の焼亡を痛惜して罹災の報の傳はるやいち速く同情の辭を我等に贈られ又は新聞雜誌上に極筆哀悼の意を述べられた。此等の諸君は大抵館藏圖書の實質を知り價値を辨へての上で汎く學界の爲に且國家の爲に其亡失を惜まれるのであるが、等しく學者と謂ふ中に奇妙にも圖書に愛好心の無い人や又自分の専門以外の本には些の興味を有たぬ人が往々あつて物質界に於ける三越白木屋の焼失程にも思はぬ様な處があるので該館の内容の極大體を擧げて一綜合大學の中央圖書館が性質上各學部の専門圖書室などと異

なつた使命の下にやはり総合的の蒐集收儲をなして居たかを明かにして聊か當事者多年の苦心の在る所を酌んで貰はうとする。

東京帝國大學の興隆に伴つた其附屬圖書館の歴史は今言はずとも可い。只明治の初期に南校開成學校當時には尠然たる一圖書室で主として學生用の教科書や少數の参考用書を取扱ふ處に過ぎなかつたのが五十年の後に至つて七十五萬冊の藏書を保管し其中約四十餘萬冊を館内に留めて居たことを思ふと涓滴の小が江海の大に至るこゝとが確と判る。尤も創立の時に舊幕時代の蕃書調所や司天臺などから引繼いだ洋書類が若干あり後年には泰西文明東漸史の資料となるやうな和蘭書(多くは醫書理化學書)が若干室隅に束ねられてあつた。此等は後に至つて整理されて和蘭集と稱された。大學が法理文三學部となつてから稍々圖書館らしい形を具へて各學部購入の本を一處に纏めて置いた。洋學の外に和漢學も興つて來たので普通の國書漢籍も弘く求められるやうになつた。併し一癖あるやうな集書はまだ無かつた。帝國大學となり次第で東京帝國大學となる頃から圖書館も次第に色めいて來て所管も複雑になり、修史局の事業が大學に移されてそれが一時中止になつた時は同局傳來の圖書全部を館に引

な業では無いと云つたが此うした同情家などの無い中で只もうそれやれ／＼的に過大の仕事を働される辛さは甚麼であらうか。日本では圖書館も文書館も無差別で紙に字の書いてある物なら何でも圖書館に持込めとあるのは困つた事である。大英博物館文庫にも佛國の國民圖書館にも米國の議院圖書館にも文書記録の集は澤山に在るが皆マニユスクリプト部の設備があつて普通の圖書の部の勢力を殺がずに整理萬端を行ふ制度になつて居るから都合が好い。我國でも近き將來に同じ制度を執らねば本當で無い。それから東大圖書館の特別集書談中に特筆すべき物はフリードリヒ・マクスミューラー博士の遺書一萬冊を網羅した一文庫を末松、高橋諸博士の斡旋で岩崎男爵の購入して寄贈された物、是は比較宗教學比較言語學、其他梵語梵文學の書類の重要なものを蒐集してあつて殊に梵文の古鈔本五十餘部は斯界著名の一集書であつた。元來此馬翁文庫は學外の篤志家にも其惠を分つ筈であつたが建物の都合上速に其運に行かず、止むを得ず一應の整理を了へてから別途の方法で寄贈主の命意に副ふやうにして居た。最近に目錄の再整頓を行つて印刷に附し既に本文七百餘頁を刷了して將に索引の部に及ばうとした處で肝心の集書を焼失して了つたのみならず印刷所に廻し

繼いだが、後に今の史料編纂掛が出来てまた之に引渡し。此と殆ど同時に内務省の元地理局所管の「郡村誌」六千四百冊を圖書館に移管したが是は日本地誌の根本資料として館藏中の一大名物であつた。次で「舊幕府評定所記録類」九千百冊を内閣から及「社奉行記録類」約一千冊を内務省から引繼いで有つた。此兩集書は並に徳川施政研究の好材料として他に無類のものであつた。それから朝鮮併合後間も無く外務省移管の徳川時代に釜山浦を經由した日韓交渉事項の文書集たる「釜山文書」約一千冊や江戸時代の「社寺領文書類」二千七百點、「舊幕諸藩調達金證書寫」一千二百冊(共に大藏省から引繼)、の如き平常は滅多に用の無いやうなものいざとなれば調査上非常の重みをなす性質の物を受入れた。孰れも學内有志の盡力で舊藏所から引繼いだとは謂ふ者の此等を整理して保管を確實にするには相當の手續がかゝつた。元來人手の少い處で此ういふ風變りの記録文書類を扱ふのは人知れぬ苦心が要る。歐米の大圖書館のやうに特別の部局があつて一々のエキスパートが研究的の頭を以てやるのとは勢ひ遲速巧拙の差のあるのは止むを得ぬ。英國の數學大學ゾルガン教授は尋常の書籍に就いてすら書籍を正確に記載することは門外の人の意料するやうに容易

であつた既刷目錄の刷本まで全部烏有に歸したのは恨悔無限である。此目錄は最後擔任の東海司書を得るまでに編纂者を替へること四回と云ふ難物であつたが今度漸く理想に近い比較的整美なる一本(海外の學會等にも贈る豫算であつたから)を作り得ることを窃に喜んで居たのに天無情にして此始末である。次に獨逸の法學者デルンブルヒ博士の文庫約六千冊、是は法科大學で購求しもので容量は多くは無いが博士の大著バンデクテンの材料となつた本を始として稍採集し難い小冊子類に富んで居た。其目錄は司書鈴木文學士の主任で六七年前に刊行されたから目錄だけは世間に遺つた譯であるが其所載の現品の一冊をも留めて居らぬのは涙の種である。此外に獨逸の統計學者エンゲル博士の遺書五千二百冊も高野博士等の盡力で購入されて一半は本館に一半は統計學研究室に置かれたが兩方とも亡びて了つた。此文庫の價值如何はエンゲルの統計學界に於ける位地によつて推量することが出来る。但し範圍は極めて汎く強ち統計學方面の書ばかりでは無かつた。此種の特別文庫として殊に注目し値したのは伯林大學法學部のヨセフ・コーラー教授の遺書集で、是は素封織田昇次郎氏の厚志と山田高柳諸教授(當時外遊中)の盡力で東大に收まつた。全部の購入

費の外に整理費を合せて十萬圓を織田氏が大學の爲に支拂はれた。其目録は法學部諸教授及圖書館長の協力を以て編纂され長谷川囑託の主任で印刷に着手し既に頭初の部分を校合中不慮の災厄に遭つてさしも重要な文庫と目録稿本とを皆無にしたのは殘懷此上も無く織田氏に對しては深く痛惜の意を陳べねばならぬ。今度の變災は到處に殘虐を悉して居るが元も子も併せ亡くした例が爰にも在るのである。

前記の外に名家の遺書全部又は大部分が遺族諸氏の深甚なる厚意で本館に贈られたものが澤山あつた中に殊に重要な分を擧げると西村茂樹先生の遺書で其遺族の寄附に係る「西村文庫」約一萬冊は和漢洋を混じた所謂雜書であるが其主力は經史文藝に在つた。其過半は既藏館本と重複するものであつたけれど豫備として猶結構であつた。大圖書館になると複本を備へて置く必要があるのは申す迄も無い。次に故文科大學教授星野恒先生の遺された手澤本約全部無慮一萬冊も頗る佳い集書で令嗣の好意的寄贈である。經史子集の重なる漢籍は始と掛漏無く集められ往々國史國文書類に及んで居り慶元時代の活字本などもあつて先生が壯歲から讀破された書物の多方面に亘つて居るのには驚かされた。大儒を作つた書物と思ふ

感謝して置く。

亡兒の齡を數へるやうであるが本館の藏書中には一たび獲ても二度とはにくい圖書が永い歲月の間に自然と貯收された。其全部を擧げる譯には行かぬから僅に數點の重要なものを記して今後の思出に資することにしよう。第一に掲ぐべきは舊幕府の官庫たる楓山文庫傳來の「欽定古今圖書集成」九千九百九十五冊である。是は八代將軍徳川吉宗が特に命じて清國より取寄せたもので、雍正の原版本で整版と見紛ふやうな立派な活字版である。挿圖の美しいのも一特色でとても近年の上海石印本の比で無い。是は明治天皇の勅志で宮内省から下附されたもので之を失つたのは何とも恐多い。上海版の縮印本も同時に焼けて了つた。同じく宮内省から永代貸付を受けた西藏文一切藏經三百五十冊、蒙文一切藏經百六冊、滿文一切經約百五十冊は共に不完本ではあるが獲がたいものである。次に朝鮮總督府の移管に係る「李朝實錄」千六百九十七卷七百九十四冊の大切なることは言ふ迄も無い。四部ある中の一部であるとは云ひながら朝鮮に猶存の三部とは多少の出入がある點で別本を成すものであるから天下一部である。刊寫を交へた頗る大形の紙墨兩佳の本であつた。兵燹などを恐れて四部を四處に配置し

と之に對して一種の敬意を拂ふ氣分も起る。公事有職の世家であつた廣幡家の「廣幡文書」約三千點は現侯爵の寄贈、野宮家の「野宮文書」三千點は文科大學の購求によつて前後收容された。兩者とも特別の擔任者を定めて漸く整理を了へた處で一炬に附されたのは何と云ふ情無きことか。南滿洲鐵道株式會社が永年に亘つて蒐集した「白山黒水文庫」約五千冊の寄贈は本館をして朝鮮本に豊富ならしめたもので其中には朝鮮の老儒文豪等の手鑑と稱すべきもの數十帖も在り又活字本の珍しい書も在つて復と獲がたい集書であつた。故瓜生寅翁の遺書約一千五百冊(和漢の雜書)、故法學士神屋牛三郎氏の藏書約一千冊(英文の法律政治書類)、故牧師フルベツキ氏の遺書約一千冊(英文の語學書及雜書)、故ビショップ・オードリーの「オードリー古典集」三百冊(希、羅文學)など悉く遺族等の厚意で寄贈されたもので特に希望のあるものは一集書として別置し然らざるは一般書架に收めて共に利用に供して居たが今は皆昨夢になつた。本學出身の物故者の記念として其知友等の醜金購求して寄贈された數部乃至百部程の集書は算へることの出來ぬくらゐ多いが、それらも其効利を九月一日の午刻までで切上げられた。仍て此機會に於て凡ての贈寄主に對して其好意を

た用意が今次の日本に於ける天災の爲となつたのは古人の想到らなかつたことであらう。大學で購入した京都相國寺舊什の「鹿苑蔭涼日錄」(原本)二百十九冊、同寺の桃源和尚自筆の「史記鈔」二十冊、「百衲襖」二十三冊は何れも世に聞えた銘物である。「日錄」は近年一叢書の内けれど原本として詳本として何處までも貴いものであつた。京都東福寺善慧軒の舊藏書を拾集した「善慧軒本集」五十部二百餘冊は同寺の名僧彭叔守仙の自筆本を中心とする五山文學書集であつた。五山版本集としては別に「密菴錄」「亢菴錄」「虛堂錄」「應菴錄」「明極集」「竺隱天柱集」「來々集」「重刊貞和集」「楞嚴經會解」「碧巖集」「禪林僧寶傳」「東坡詩」「韻府群玉」の類凡七八十部二百餘冊を收めてあつたが之を採集するのは偶然ばかりでは無かつた。元來佛典の普通本は本館に稍豊富であつたが是は主として島田蕃根翁の藏書の一部を譲受けたからで其出費に就いては文科大學、時の學長は井上博士に負ふ所が多い。館の經常費は今も昔も極めて切詰で稍大きな集書の出物などがある時は館の爲に之を收容する必要を感じても手が出せぬ。さう云ふ場合は止むを得ず合力の主を頼まねばならぬ。自分の物にでもするやうに奔走してある

くのも可いけれど時としては檀那の不機嫌な顔を見ねばならぬのは辛い。其方面に關係の無い先生たちからは餘計な事に骨を折つて居ると謂はれるが固より一方面に偏執を許されぬ我等の八宗兼學的訪書は或一時に於て或一科以外の凡てを顧みないやうに見えるのを當然の事として居る。處が性急な病人は招いた醫者を自分一人の爲の醫者のやうに思つて其醫者が他家を廻診するのを待切れずに焦れ込むが如く圖書館の求書法に就いて我儘の意見述べる人が少くない。併し之を氣にして居ては我等の立場は無い。恰も醫者が多くの患者を犠牲にして只一人の顧客に走ることが出来ぬのと同じである。特別急病に非ざる限り少し氣を永くして待つて居れば其醫者は早晩平均等を望むのはさる事ながら何の學科にも必ず一冊づつ殖して行くと云ふやうなことは出来ない。其證據には歐米の大圖書館でも其或一館には何學科又は何件の文獻が網羅又は能く蒐集されてあると云ふ事が比々ある。大英博物館文庫の如き萬有的の處でも藏書の種類について云へば多少の偏重偏輕を免れぬ。東京帝大の圖書館の備本に何が過少何が過多と云ふ程の事はまだく早い、それを言定めるのは三百萬四百萬の冊数を算へる後であら

館及東京帝國大學文科大學國語研究室の數箇所を公平に配分したものであるから本館所収の分は亡びても他館の分は残存して居る。京大圖書館に現存の黃表紙類などは當時二部以上在つたものの一である。黃表紙は文學としては決して重要なものではないけれど編述當時の世態嗜好さては施政に對する民衆感想等を反映する遊戯文字として考古史料となるものであることを斷つて置く。古淨瑠璃本集のみは大野屋に關係無く東京で狩野文學博士が発見されたのを請うて割愛して貰つたものである。此件に限らず凡て珍書稀籍で研究の材料となるやうなもの獲得には他の厚意若しくは助言に頼ることも少くなかつた。然るに今回の事變の爲に此等の圖書の數を悉して失つたことは我等の外に當該諸士の落膽をも惹起したと思はれる。

洋書の稀本では所謂インクナビユラは一部も無かつたが第十六世紀の初期以後の版本で泰西印本發達史の資料となるものは數十冊に及んだ。かの有名な和蘭のエルゼヴィル版の標本もかなり澤山に在つた。古文豪の初版本などで珍重すべきものは殆ど無かつたと思はれる。日本在住のジエヌイト僧侶の報告書翰集類の刊本凡六十部は坪井博士の盡力で徐々に集められてあつたが是は京大圖

う。然るに僅に四五萬冊（中央館常住のもののみについて云ふ）で天折したので仕上げを見せることが一寸出来なくなつた。我等區々の手柄の爲などでは無く大學の成長の爲に之を惜むのである。さて談を前へ戻して普通本以外の纏まつたものを尙少し舉げると圖書記録發達史の標本の意味に於て古寫經類古版經類合せて約三百卷、此中寫經には天平の御願經から南北朝時代の足利尊氏願經まで、版經には宋元槧の藏經の一部や日本版の雜經があり、金澤文庫舊藏の「廣弘明集」「釋迦譜」などもあつた。下つて文祿の役後日本に創始された慶長寛永年間の古活字版約百部、是は本館創立の頃から自然に收容されて居たものを後に彙集したに過ぎぬが今は稀觀の一種である。更に下つて古淨瑠璃本集凡二百部、假名草紙、西鶴物、八文字屋物などの江戸古小説類凡一千部、同じ小説の一種所謂黃表紙凡八百部なども注目すべきものであらう。此等は大部分名古屋の大野屋舊藏の本で或一時に收容された。當時の書價は極めて低廉であつたがそれでも館費では應じ切れず例の如く文科大學（時に坪井博士學長代理）の助力に待つた。大野屋本は非常の多數であり孰れの圖書館も一手では求め切れぬので、其中の採るべき書を選んで本館、帝國圖書館、京都帝國大學圖書

書館の所集に後れた姿である。元文科大學教師ドクトル・リース氏の手で歐洲で採訪された日本に於ける基督敎宣布及迫害に關する書凡二十部（第十七八世紀所刊）は前のジエヌイト布教刊行物と共に容易に得かねるものである。坊間絶無では無いが今は大分の重價を呼ぶレブシウス著埃及及エシオピア記念物十二冊や佛帝那翁三世の命で寄贈された漢佛辭典（外皮に金字葵の紋章を附した特別製本）やドドネウスの植物誌の類も數十百種に及んで居たが今は其片影も見ることが出来なくなり同時に本館五十年の歴史が湮滅覆没されて了つたのは返すく返念至極である。

圖書類は比較的近年の收容に屬するもので極めて珍奇と稱する程の品は少かつた。それでも古繪卷の主な者の摹本類は略備つて居た。其中にも田中納言摸寫の「伴大納言繪詞」三卷、住吉廣尚摸寫の「紫式部日記繪詞」二卷摸者不詳の「當麻曼茶羅緣起」光明寺本）一卷、同じく摸者不詳の「竹崎五郎繪詞」二卷、同じく「福富草紙」一卷の如きは巧に原本の眞を傳へたものであつた。版畫では世間の好者を驚かすやうな逸品は無かつたが、精刻の標本として鈴木春信の「青樓美人合」や喜多川哥麿の「蟲選」「汐干の土産」などがあつた。安藤廣重の「東海

道五十三次圖」は別版七八種に達し、同じ人の他の風景圖も次第に集められた。併し浮世繪類の蒐集に世間と競争する必要も資力も無いので此方面には將來の收儲の發展を望んで居なかつた。外國の大圖書館には必ず版畫の一部が在つて大に美術愛好心をそゝる氣味があるのに反して日本の圖書館は實は圖の字を冠することを嫌つた風のものであるのは不思議である。大學の圖書館でも其大學に文化學科の設がある以上版畫の標本位を備へて置くべきであると思ふ。勿論相當の經費を有つての上の事である。

眼をつぶつて默想すると種々の良書佳本が奥庫に在り又無數の有用書が普通書架に並んで居る様が歴々とあらはれるが一たび眼を開くと廬生の花紅葉の如く茫々として影も無い。昨日まで本館に頼つて研學して居た人々の所感も同じやうであらう。これを思ふと縦令少くとも綜合大學の綜合圖書館らしいものを一日も早く再興せねば大學の體面をも保てぬのである。輓近の大學教育は圖書館を實驗場としてすべての研究調査の源泉資料をこゝに仰ぐ傾向が日一日と著しくなつて來た。隨つて大學の學員は全力を擧げて圖書館の擴張を圖つて各學部、各學科各員の共同善を得ようとして居る。方今大學の規模は其

圖書館の大小貧富によつて表證される位である。ハーヴァードが百八十萬冊の圖書館を有ち、エールが百二十萬冊の圖書館を有ち、コロンビアが八十萬冊の圖書館を有ち、シカゴが殆ど同様、コーネル及プリンストンが各之より小さい圖書館を有つて居ることやオックスフォードが百萬冊のボドレー圖書館、ケムブリッジが九十萬冊の圖書館、エチンバラ、アバデーン、マンチエスター、リダアールが各それより小さい圖書館を有つて居ることは各大學の品等を示すと謂ふべきである。而して大學として其中央圖書館を有たぬもの無いのは勿論、之を小さくして有つのは變態と看做されて居る。中央館の外にデパートメント圖書館やクラス圖書館の在るのは仔細無い。但専門圖書館さへ在れば一般圖書館は要らぬと謂ふのは歐米大學に其例を見出さぬ。此く觀來れば我が大學圖書館の今次の災禍に罹つた後の復興は政府の力大學自身の力及學員各自の力を協せ之に加へるに學外有志の深厚なる同情を以てして其目的の達成を速めねばならぬことと思ふ。

今回の罹災に深く鑑みて圖書館と周圍の諸建物との關係を考へ又其建築構造に注意することを怠つてはならぬ。地震にも火にも水にも風にも抵抗力の絶無なる程に弱い

○日本の各地に行はれた俗謡、民謡は今と西洋の樂譜に合は  
ず新法より作り代り、全く新しいものとする、元來此の日本の  
在るべき民謡を口より口へ傳はり、録しんとするものさう、洋  
びて同じ様々あり、先づ録しとすものあり、此が、コンチ  
歌謡の研究家、録しんとせん、日本は明治年ヤッ  
ト之れを研究せんとするものか出来て未だ、随つて之れを  
集めることなつとせしめるものもある、然れ、日本の此等  
の民謡の風味を感じ、或は研究し、或は傳へるもの、或は  
此のより、ラフカテス、ハルンなど、今此等の  
歌謡の指を深めしめる、族ハルンなど、或は傳へるもの、  
この中のみ、全体此の民謡と異なる教の多いもの、地方  
地方より、各々の特徴もある、中より、根氣のものを、

所謂ナンセンス、ワアルス、無意味なもの、或は、  
の種類を大別すると、どんなものがあるか、ハルン  
の分けたもの、不備である、或は、たのしみである

- 1 天象と天象との歌
- 2 動物と動物の歌
- 3 種々たる遊戯の歌
- 4 物語りの歌
- 5 町子完結、千穂歌
- 6 子子子歌

コンチ分類は全体が包括して、元來のものが、およそハルン  
こんなものがある、どうせコンチ歌謡を、初編から、或は、無  
教育の男が、口より口へ傳へるもの、或は、夕ワイカ等の、多い

音調やういふ意味の無いものもある。あつて、コシナとあるが感傷  
 がいいわいいわなまじり葉をふるふる愛あつて、中々も迷信を  
 あらわしとあるものもある。恋を唄つてあるものもある。宗教上の批評  
 記をあらわしとあるものもある。物修徳のこのうらやまをいふ愛を  
 誇りてあるものもある。何んぞと理窟本位に元祐より日本とある  
 小書雨流のあるある家の人と全然取らぬとて女と考へる  
 ものもある。ナンとセニス、ウァルスと又一種のほめてある。何ん  
 ぞとあるハ、故う理窟を云ひぬ、ウァルスとある。ほめてある詩  
 的の味を存してあるものもある。今やコシナ事をあつて  
 云いとあるものもある。亦とりうらの徳を又平けんとするもの  
 もある。唯ハハハの候を西洋の人かめつる北葉の民徳  
 を視てあるもの一編を度々かいて五月廿九日とあること

はんこも他の羽子板をいふを云ふ。味を感へるか、うん  
 へのつて完歌を説く所も左の如くある

正月の休暇より折道ハ歳暮を乙女子が板板か或ハ  
 羽子とつて或ハ種々ある。年暮の節を為す女め  
 唄る美観を呈するもの、袖中き巻物々の時衣を  
 まこといひる北葉式多の乙娘の節を美わいさとのを  
 恋像と見いと雅く、走りまわき胡蝶のえを之と云  
 へつべき、草葉の畫、その温雅優美なる板を畫  
 くる古た巧みなり、北葉の畫より年暮つける或群  
 九の乙女子の巻刷り、年暮を年暮に修けり、其の折  
 の風俗をあらわし、仙女見たん乙女子のその微笑め





若くは蝶、路上の星も七若くは花つきの星も七の如き日帯  
 の多物な潤像ある事の多し 沁みぬ歌に大抵、児童を  
 愛撫する一語句を交えて、順良なるは児童と照して  
 どの約束と、各地悪くはその結果此方一きことある  
 との暗示を交互述あるが著し、その約束は善悪の  
 名物若くは、取玩りの多し像、癖めし、所習り  
 母が之を加ふるにはあるが、我儘多し叱責を四列  
 する力ある妖怪若くは悪魔が加ふる也、そのこと  
 らる、日本の初ん初歌に、此の一般の観測は何れ  
 の點若るる例外を提供せんと、その也、珍しき事  
 直して中み殊に東洋的なる性質をあらわす  
 又云く

歌謡の讀者は北著の歌・初めの子子子或は子子子  
 こも、假音の現りも、せ又せ定めて一語句を吟し、  
 めこころも、し、善し佛の東西の揺籃の歌に、  
 くに同く、強んとい彼の音節の子子 *nene*  
 への假音の如きんいさる (佛の東西の子子 *nene*  
 方言もは子子子 *nene* 或は *nene*  
 への *nene* は善悪の南邦佛の東西の母親之を使用  
 し、北邦の如く之の代りも、*nene* を以てし、  
 子子子の佛語と子子子と、日本後と、同く  
 読原上の関係は善悪の如く、日本後の子子子と、  
 句は、寝るといふ意味の子子子と、  
 と、*nene* 坊といふ意義も、子子子或は子子子

其の邊の一綴者と云ふに子といふ意味のこもる語が  
 法合しや此のさういふ後より、ゆんゆんの子よといふが  
 其の真意義あり

日本の童謡の内、人里と歌謡をの法塔を歌ふよのあ  
 る三竹ハルンと云ふたの如く評してある

歌謡名のフエリリ、ニールル中、蛙まのハ鳥が美し  
 きと世を悪むこと、或、異性の動物が結婚せよと  
 を暗示せよかあること、之を動して時と皮意の批評  
 を下すものあることは、余は此の日本の子供歌を  
 想ひ起し、斯の如き動物の無法なる皆理を  
 之を以て現象の後又動物とらし、しるは、不有なる  
 ことを、悲むまこと、その無法なる動物を没する

けつと鳴あつたり、とんと斯のこときフエリリ、フエ  
 ルが、多野のさの海と東洋、舟のうを得おあ  
 るが、人里と人里と云ふものこの法塔を思おも  
 東洋人の心きく、動物を多くいふ意の法、人里を  
 現し得るものと信じ居ること、高きも皆理と  
 い見えさる、動物の人の信仰は、権のハ、一切の生物  
 ハ、さう、その空を包める形おを唯れ毎りの物  
 さん、動物の信仰と聞くと、動物の習性を考へる  
 人も、日本のフエリリ、ニールル、其の味の  
 を、解叶いさるる

佛教地理の含意ある童謡と云ふは、  
 余は其意あり、うらま、あつと、高きと、其の意は

兒童が如く歌の歌として誦する一種の聖書四福音  
 のこの書、こは然らざるに兒童の教育が主として傳  
 教傳信の事、聖書を、寺院に於て傳授せしむるに  
 くるに又二箇の書、教を、若くは先づ附屬の  
 書、教を有つた、り、時代を、残存する、り、  
 する、り、又その、り、は、古く、珍く、き、不、の、無、  
 の、西洋人の眼、り、異に、感、り、す、り、唯、ま、  
 目の、撰、擇、也、歌の、歌、り、大、あ、り、る、り、  
 り、な、り、る、り、

*Japanese Melody* と、い、は、こ、の、書、の、甚、く、  
 の、由、を、説、し、る、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
 の、由、を、説、し、る、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

二十一年、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
 市、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
 著、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
 二、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
 と、思、り、り、  
 十三年、り、り、り、り、

漁夫の歌、田村歌、馬友の歌、船千の歌、田村  
 初、田村歌、旅行歌、伊勢語りの歌、悠傳吹木  
 伐、吹、板、歌、り、り、り、り、り、り、り、り、  
 り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
 り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

○正月の朝分、り、り、り、り、り、り、り、り、り、





○ポスターと云ふものは未だ日本に充分理解せぬの處つて甚だ  
幼稚である。看板をいふペンキ屋の招牌を畫り去らんとする物  
を仕末か、花手はポスターと書くことと恥辱とを思ふ  
のである。別産をポスターと日字腕を揮ひ、徳河  
の面目である。換金を時が来るであらう、現に此今、少  
しく其の傾向が見へる。主婦の友といふもの、旅徳の表  
紙の中、一海の洋画家が有いてゐる、是れ竟に旅徳  
の如く行高が廿五歳と云ふ日本に類の無い多板である  
から、書き地帯であるから、徳河七田吉人、執筆を以  
敢てするのひあらう、亦雜誌の経営者家の表紙を以

つとポスターに應用するから、画料を張るに必要である  
画料が如何なるものか、二十五年の冊子に刻つて見れば、一冊に  
就ての単價は減つたのである。押印も、ポスターも多量に行  
ふれば、若干の減價を取ることが出来る。随つてポスター  
の效用も増大するのだ。西洋では日本の換りペンキ  
よりよい着色版、ポスターが少く、多くは印刷物がある  
と云ふ。印刷物の且つ洋山に流布する為め、名手をして  
考へしむる必要も、さうもなすものか、さうく西洋のポ  
スターも名手が多し、ある所に繪畫の展覧會の如  
く、此時ポスターを出して陳列して、そのあつた、祝文  
を皆此ポスターのみを激賞して他の繪畫を貶中し  
置かうとする者あり、是れも後、ポスターの陳列を禁ず

たとふが、これ一面に於て名手の画があることを務めると、此一面に  
於て西洋人がポスターと云ふを注ぐことを務めようか、ポスターの  
画と他の無意味な画とを区別して、最も實生活に觸れる者  
かの目的を以て書くべきである。他の繪畫も、多くの觀客  
を惹き附けるもの、當然がある。今、この大震災  
の後の復興の爲め、我が邦に於て大いなるポスターも  
要する時がある。これが西洋の如く、日々夜日ドント  
洋山にポスターが出ているのである。さうして、人心を  
作興し、全大の觀客を興してゐる。これは、日本に  
ハ此の大切な機會を更にソナタを見よ、ポスターを  
大いに利用するの端をみる。亦、ポスターを修むの  
藝術を練明するも、實に困難の場がある。この政府

この老へかくして火災を防ぎ得たものであ



七秋人七一尚氣か附ず、あるのを遠域のものとあはれ

○夫人が古春の婦人、定八つと若返へつと人をさよく云ふ、こんどは二枚の  
意味がある、古春の婦人と枕席を照らすと云ふこと、一ツ  
唯比花とい婦人をね手する、まゝに、閨房のこと、二、関係七の  
こんど一ツ、その何んか夫人、若返へりの効があること云ふてあ  
るが、前者まゝと云ふも、さうく古来い多く例がある、何れも夫人も  
元地から若い意を蓄てあるものかいくもあふ、此流ある人の云ふ、  
男性の夫人が女子の教育する、其つてあるものをあつた、  
ぬ、その評を性懸、い、生する、分必がある、雨、さ、さ、

この老へかくして火災を妨ぎ得たものであ

か自れ無<sup>く</sup>戻<sup>る</sup>か<sup>ら</sup>比<sup>し</sup>て<sup>も</sup>、故<sup>に</sup>予<sup>の</sup>時<sup>の</sup>扱<sup>ひ</sup>也<sup>ある</sup>が、予<sup>の</sup>美<sup>も</sup>亦<sup>も</sup>  
の異<sup>性</sup>と交<sup>際</sup>する<sup>に</sup>核<sup>合</sup>の<sup>ある</sup>もの<sup>を</sup>フケナク、<sup>但</sup>抑<sup>へ</sup>る<sup>に</sup>向<sup>つ</sup>て<sup>も</sup>  
事<sup>柄</sup>の<sup>西洋</sup>の<sup>もの</sup>を<sup>コソ</sup>扱<sup>ふ</sup>核<sup>合</sup>が<sup>始</sup>終<sup>ある</sup>、<sup>但</sup>日本<sup>の</sup>もの<sup>を</sup>  
藝<sup>妓</sup>を<sup>呼</sup>ん<sup>び</sup>お<sup>お</sup>ぶ<sup>外</sup>の<sup>もの</sup>を<sup>身</sup>、<sup>或</sup>ん<sup>ど</sup>日<sup>核</sup>合<sup>が</sup>無<sup>い</sup>、<sup>その</sup>  
く<sup>あ</sup>性<sup>の</sup>交<sup>際</sup>する<sup>に</sup>核<sup>合</sup>が<sup>あ</sup>り<sup>て</sup>比<sup>し</sup>て<sup>も</sup>思<sup>ふ</sup>、

○婦<sup>人</sup>の<sup>肉</sup>體<sup>美</sup>と<sup>よく</sup>極<sup>め</sup>る<sup>こと</sup>の<sup>出来</sup>る<sup>もの</sup>を<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
と<sup>し</sup>て<sup>考</sup>慮<sup>の</sup>者<sup>は</sup>、<sup>先</sup>境<sup>入</sup>の<sup>もの</sup>から<sup>比</sup>し<sup>て</sup>も、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>を<sup>無</sup>氣  
が<sup>旺</sup>人<sup>の</sup>體<sup>格</sup>が<sup>先</sup>き<sup>の</sup>ま<sup>つ</sup>から、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>交</sup>際<sup>が</sup>美<sup>で</sup>  
肌<sup>雪</sup>の<sup>滑</sup>麗<sup>が</sup>先<sup>の</sup>ま<sup>つ</sup>ら、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>體</sup>格<sup>が</sup>美<sup>で</sup>肉<sup>体</sup>  
美<sup>を</sup>鑑<sup>賞</sup>する<sup>に</sup>核<sup>合</sup>が<sup>無</sup>い、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
自<sup>今</sup>の<sup>體</sup>格<sup>が</sup>瘦<sup>れ</sup>衰<sup>へ</sup>る<sup>肉</sup>が<sup>多</sup>く<sup>皮</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
から<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>異</sup>性<sup>を</sup>抱<sup>擁</sup>する<sup>もの</sup>、<sup>こ</sup>の<sup>異</sup>性<sup>時</sup>代<sup>に</sup>於<sup>て</sup>

全く閉<sup>じ</sup>こ<sup>め</sup>ら<sup>れ</sup>て<sup>い</sup>ろ<sup>く</sup>の<sup>點</sup>に<sup>對</sup>して<sup>も</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
を<sup>比</sup>し<sup>て</sup>も、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>體</sup>格<sup>が</sup>豊<sup>満</sup>する<sup>肉</sup>が<sup>多</sup>く<sup>皮</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
乳<sup>腹</sup>部<sup>の</sup>隆<sup>起</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>體</sup>格<sup>が</sup>豊<sup>満</sup>する<sup>肉</sup>が<sup>多</sup>く<sup>皮</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
す、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>體</sup>格<sup>が</sup>豊<sup>満</sup>する<sup>肉</sup>が<sup>多</sup>く<sup>皮</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
る<sup>肩</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>體</sup>格<sup>が</sup>豊<sup>満</sup>する<sup>肉</sup>が<sup>多</sup>く<sup>皮</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
氣<sup>の</sup>時<sup>代</sup>も、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>體</sup>格<sup>が</sup>豊<sup>満</sup>する<sup>肉</sup>が<sup>多</sup>く<sup>皮</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
と、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>體</sup>格<sup>が</sup>豊<sup>満</sup>する<sup>肉</sup>が<sup>多</sup>く<sup>皮</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
夫<sup>人</sup>の<sup>體</sup>格<sup>に</sup>比<sup>し</sup>て<sup>も</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>體</sup>格<sup>が</sup>豊<sup>満</sup>する<sup>肉</sup>が<sup>多</sup>く<sup>皮</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
は<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>體</sup>格<sup>が</sup>豊<sup>満</sup>する<sup>肉</sup>が<sup>多</sup>く<sup>皮</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
る<sup>か</sup>ら<sup>い</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>體</sup>格<sup>が</sup>豊<sup>満</sup>する<sup>肉</sup>が<sup>多</sup>く<sup>皮</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
ぬ、<sup>こ</sup>の<sup>異</sup>性<sup>時</sup>代<sup>に</sup>於<sup>て</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>體</sup>格<sup>が</sup>豊<sup>満</sup>する<sup>肉</sup>が<sup>多</sup>く<sup>皮</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
淫<sup>行</sup>を<sup>恥</sup>ず<sup>る</sup>扱<sup>ふ</sup>場<sup>合</sup>も、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>體</sup>格<sup>が</sup>豊<sup>満</sup>する<sup>肉</sup>が<sup>多</sup>く<sup>皮</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>  
淫<sup>行</sup>を<sup>恥</sup>ず<sup>る</sup>扱<sup>ふ</sup>場<sup>合</sup>も、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>體</sup>格<sup>が</sup>豊<sup>満</sup>する<sup>肉</sup>が<sup>多</sup>く<sup>皮</sup>、<sup>若</sup>い<sup>時</sup>の<sup>美</sup>術<sup>家</sup>と<sup>別</sup>





いこのかある

一月四のあす

○郷里の北沢新報：新年、首刊後無難と刊行す  
まの(き)の後、海をしのめ、批の如く、あふる元を達し、  
の心から、保存の便

新年  
旅館 魚 電話 十五番

正賀  
御料理 信越線來迎寺前  
旅館 立見屋 電話 十一番

恭賀新年  
全科  
一般  
來迎寺療院 京醫學士藤井正  
特に内科(婦人科共)小兒科

恭賀新年  
三島郡來迎寺前  
佐藤運送店 電話 五番


正賀  
高頭製館所 三島郡深澤前

賀  
純良藥品 新潟縣野野町(電話十六番)  
處方調劑 新澤博愛堂  
有効賣藥 藥種商

優良な原料と熟達せ  
工に依製作ある...松山堂  
製筆の御愛用願上候

松山堂  
製造 (新潟縣關原)

純良毛筆



大日本清酒  
老松



新潟縣三島郡關原  
外川慎之助

恭賀新年

天下第一品

登録



正賀  
米穀商  
肥料商

正  
金  
長錦  
合資  
會社

これは自費金かと思われる。この老へかくして火災を防ぎ得たものであ



費せしめられる、この點からしての打撃で、勢ひ家賃は高からざるを得ないのである、地主にしても、災後の今日だと云ふので自然に代を賣るともなる、而してそこに治まつてゐる商賣人の商賣はどうかと云ふに、すべてが間に合はせの世の中となつたので、大道店の房が却て繁昌する、バラックには客が行かない、バラック生活者保護の爲に、大道商ひを禁せねばならぬとなつて、現にそれが行はれつゝある、かくの如き状態の狀態を超越したバラックを造るの日は、本年からであらうと思はれる、乃ち銀座、日本橋、その他半永久的の店、住宅が造らるゝのはこれからの事である、服部時計店のバラックは十八万圓かゝつたと云ふとあるが、それともこれは假家に過ぎない、昨年までの概況では堂々たる大商店がまるで

### 博覽會に於ける一時の買店

の如く、それよりもはるかに疎造の店を商賣してゐたものだ、それとも幾里四方に亘つてのあの大火の後をうけてのこの復活、如何に疎造であつても、かく早く假家の興つたと云ふとは復興精神が如何に高調されてゐるかを知ら、一の左券ともなるわけだ、復興の初理想が非常に縮小され、漸次に縮小されて、最初の考への殆ど十分一位までになつたについては、一件餘りに初の宣傳の仕方が大に過ぎた、むしろ空想に近かつたのである、實際に臨んで行はれなかつた爲に一般の輿論としては、そこに不満が多い、自分の如きも百年の長計を立てる、世界有数の大都市とするには、機會はこの不幸なる場合より外にはないものである、かかる場合に於てこそ、遠い未來を考へて、大なる謀を施すべきであると思ふのである、如何に財政の上からの打撃であるにしても

### 餘りに遠慮のない計畫では

ないかと思ふ位である、かかる問題は改めて論議するまでもなく、今度の大火から得た二の教訓に省みても理解されねばならぬとてある、地震と云ふ天災は、如何にしても免れ得べきではないのである、さう事が極まれれば、豫防の爲の構造が大切となつて来る、地震に耐へ得る、火災を防ぎ得る建築が必要となつて来る、こんどの大災は、地震の害大であつたが、火災の被害はさらに一層大であつた、百圓億と云ふ大なる財産上の損害を被つたのは、多く火災から來たものである、その原因は、單に水道の消火栓にたよつて居ると云ふその時に、水道破損、断水したのであつた、餘りに水道にたよつて居た、これも火災を大ならしめた一因で、今一つは、火災保険に信頼し過ぎたのも、大原因となつてゐた、火災保険をかけてゐるものは、不可抗力の場合には、保険金は取れないものであるなと云ふとは

### 十人のうち八人までは考

て居らぬものであつて、火災にかゝれば保険金がとれる、この考へ

### 地下室の必要も感じて来る

昔から一番火災を避けるに大切な場所が穴倉であるとして來たものだ、今度も地下室に入つた者が多く助かつたものがあることを知つては、火に對しての地下室の設備、それを忘れてはならぬ、また自爆の薬品の取扱ひ方、瓦斯タングの取扱ひ方、これ等について考へて置かねばならぬ、日本は火の多いに於てである、特に火事は江戸の花とまで稱せられたほど、日本の都會には火災が多い、従つて餘り考へをもつて家を建てても構はない、建てても直に火事と燃けると、云ふ野蠻の考へに支配されるので、西洋の如くに十分に堅固なる建物を、一時即成でなく、幾代にも亘つて建てると云ふ考への起らざるを得ないのだ、西洋では五六階位の大きな建築となる、初代が第一層を造る、二代目が第二層、三代目が第三層と云ふが如く一代一層位に、遠大の計で建て、行く、日本に於てもさうありたいものである

### 日本流は如何にも短兵急だ

基礎工事も不完全のところがあれば、どつかに手を抜いてゐるところがある、それであるから、偶々火災震災が起る、直にそこが災厄にかゝるのだ、まさか全部の都會をかくするわけにも行くまいが、せめては帝都東京の最も大切な區域をかく堅固にさせたいものである、また人力尊重、この考へを持たせるとも大切である、西洋文明、餘りに物質文明を重んじ、買ひ被つたる結果は、人力を輕んずるやうになつた、安政度の地震にも火災は各所に起つたのであつたが、延焼に及ばずして止んだのは畢竟人力によつて消し止めたからであつた、此人力によつて消し止める習慣を復活させねばならぬ、昔の人の良風、それから云ふと、自分の勤め先に火災が起つたとする

### 何事も打捨て自分の家が焼

けても構はず、先勤め先の主家へかけ附たものだ、これは一種の道徳で、職を食む士分が主家の急に赴く、町家ならば店へはせつづける



る、然るに今度の場合には、人て、何もかも西洋化ふれして、各心の儉收態度に達してゐたので、戸にあつた戸を派し、蒸気ボン官吏で責任を重し、自家管掌の記に依頼し過ぎてどの家でも消火隊等を持ち出す、かかる行爲に出設備を怠つてゐた等も、災の害を了たものは極めて少かつた、それ大ならしむるに手做つて居り、江戸の海官吏生活をして居る、市の吏戸の粹と云はれた消防夫、只今て

はかれ等のなすべき仕事がなくなつて居るが、この消防夫の復活、これがまた大切であると思ふ、火を消すばかりでなく、勇み肌の一、日事あれば急に赴く、場合によつては職に殉ずる、犠牲となつて本分を全うする、この制度を復舊するとは、だれ切つたる精神に大なる刺激を興ふるとなり、人心を鼓舞し興ずるの助けともなる、徳川氏何百年の間消防夫の働いた功績には驚る大なるものがある、當時武人は敵強に流れ、消防夫意氣の旺なる、むしろ武人と地位を替たのであつたのに、西洋文明の輸入からこの消防夫の制度までをも廢滅に歸せしめたるとは、實に遺憾に堪へない

厚顔なる話で昔ならば切腹

ものだ、家屋の建築も不完全である、人心の儉收態度、殊に責任觀念の地獄せる、これこそ震災當時の火災を大ならしめた最大原因

# 震災國民と新生

もので、もしこれが隣家と云ふものがなく、真に孤立してゐるとせば、少しの風にも吹き飛ばさるゝ位のものである、無論、無敵でもない、  
 震災はトタン板を葺てゐる、これ無用にしてこの冬分を無事に過す、  
 實に疑問だ、  
 ちをなさない、  
 も住まはれた、  
 屋根に十分だと號合したものだ、  
 屋根に板を葺く勿れトタン

新 森山新藏  
 電話十番 電略(モリ)

東小千代 松次  
 堀之内 電話三十八番

恭賀新年

土木 築木 請負  
 堀之内

水落新次郎  
 電話五四番

恭賀新年

堀之内 三寺鐵工所

恭賀新年

御料理仕出し  
 堀之内

小川樓  
 電話二十四番

恭賀新年

青物鮮魚 洋酒罐詰  
 堀之内 田屋  
 電話二十番

恭賀新年

酒小賣、まんぢゆ、菓子類品々  
 堀之内 吉田正藏  
 電話三十六番

恭賀新年

北越新報大販賣  
 北魚沼郡堀之内  
 古寸三至新門部

恭賀新年

石油器具商



○笑ハある解すべきものか、アリストートル以来これに就いては、  
のそし研究は比人が深くなる。笑と哲家の興味の味を以て  
て取扱つてゐる問題もあるが、今以ては研究の中にある  
不だに、この場合も七八二の類に解が二つあるし  
る。

アリストートルやホワプスといふ笑の原因を「機械退化  
不釣合」「運降の不釣合」「無致とさう比の期待をい  
ふ分類してゐる。

成るものゝ一面の研究があるが、何故か不釣合のさうや期待  
待の破れにあり、笑を促すが、解せんといふ、期待が  
無致とさうの比を悲しむべきであるといふ。十セはさういふ天  
とさうか、要するに、古哲の機械論と、滑稽論と、笑止を

ことゝいふが、笑の原因であるといふ、笑の意義  
と未だ研究の文合ひをいふ。

近世の笑の漸や一歩を進めれば、笑がいろいろ出て来たり、  
リイ父の説は、笑を以て緊張から完全解放と見れば、  
と見て居る。ブリッス世史の説は、半意識的満足の内  
作用と解して居る。フリエーロ氏ハ笑を以て精神使用  
の経路と禁制を過かすの解放と見てゐる。又ツラ  
イル氏の説は、笑を以て生理學上一種の清浄法と  
見て居る。笑は区別がおのづから共通點があるとい  
古哲の解は、一歩進んでゐる。

進歩した文化を帯び、原始的衝動が抑制を要する、社会

國家の存続の爲め、自我的及自他的衝動の数を  
抑制し、出来る丈狭く深い文雅な生活をして  
せよ、フリエート氏曰く、人文の達の根本原則の  
一つは、利己的の原始状態を以て、衝動を否認す  
る事である。

元来、笑は、社会の壓迫に抗して起る最單純な形式である。  
之に在るは、物を見る事、抑する事、人を見る事、  
其の突如現るは、何時の何時の起る喜悅の破綻である。  
然るに、笑は、社会の藝術性から一時原始の放縱、進んで  
此の心ある、笑は、社会の不斷の壓迫からの解放である。  
又、文藝の進軍が、僅に滑つて、時刻する、其の喜悅の表現

である、即ち、此れ半意識的満足の状態に、凡そ、社会の錯  
誤を習得せしむるに思ひ出さるる、太古の種族記憶から起  
るものである。

.....

笑は、不斷の進行力の壓迫から、忽ち、又、一時的の脱出  
を現し、即ち、礼儀、通儀、優雅、喜樂あるか、  
から、解放せしむるに、其の時人心は、古く、本能の衝  
動的な方面より、一時走るの心ある、而も進行力が、本  
復して、壓迫を知らざる事、利つて、故に、笑は、文藝の  
才、一時の及、逆作用である。

以上を、G. T. W. Hartwickが、絶續後心現論、之を、  
一端であるが、更なる左の如く、そのものである。

笑の大要は弛緩作用の効果がある。凡ての緊張は弛緩に困難  
な状態に向ふ。任良の傳染性の笑は救済するものが多い  
は、そして笑は老人の弛緩の時を起す。又日常生活の重荷  
から解放される時を起す。精神の休養救済作用を  
為す。つまり緊張からの解放である。そして笑は善なる感情  
に伴ひ、又競技、音楽、饗宴、飲酒の弛緩作用も起す  
して起す。

と説き兒童の笑に就いて

兒童の生活は善なる弛緩の生活に笑は之を不助の弛緩伴す  
るを常とする。兒童が喜ぶ笑は微笑より多し。時の苦痛  
を軽減する悲しさを感ずる痛さ。又兒童を成人にするは  
精神的信用が起るに時がある。即ち兒童が或る抑制

衝動を感じ、又行為の上で或る修正の必要を感じ、又  
如何等か新しい発動力を取得し、弛緩の必要を感ずる  
集中して時を起すものがある。右の中、新発動力を取得し、  
際して笑は喜ぶものがある。一例は、小児が始めに一所ある  
き出し、この時がある。其後、緊張し、心能と不確実な  
感がある。そして注意力が満ち、筋肉が強く切つて、顔  
は振つて居る。此のち、喜ぶが仕逐げ、そして、又時弛緩と笑  
ひが起る。そして顔の筋肉が弛み、小児は再び喜ぶもの  
である。其に小児は、喜ぶものがある。

笑の起原に就いて左の如くを言ふ。

笑は或る種の緊張からの解放に附随して起るものか、善なる

此の物神の緊張といふものは、社会的束縛の適度であるが為の  
努力から起る。是が何時といふ事、若大なる社会現象と云ふ所の  
小異相から起る現象は無つたの事、心理学的にいふと、笑  
ひ其の初め心身緊張の後で起る事である。筋肉の弛緩である  
は、其の初め、ダーキンは其著「物神の表現作用」の中心に生  
現るもの見、微笑、大笑の現象を、意義を説明した。又左の  
引用するアングエル博士の説、一層、古代の意見と代表して  
ついで、或る程から従来の学説を補修し、訂正して  
ひら

「笑の緊張と之の伴ふ息を呑む形から解放するに時起る  
此の息を呑む形が中断される。其時顔や口や呼吸の  
間をこの筋肉の神経作用は笑と云ふ」

を感じ以て場合、又期待が喜ぶ所の結果を、商うに場合、喜ぶ  
此の息を呑む形が中断される。其時顔や口や呼吸の  
間をこの筋肉の神経作用は笑と云ふ

早期の人間を、歴史の上、如何なるものか、斯種の緊張解放が  
起つたことか、あつたかといふは、早んどの心身の力を集中して  
後ら、又は原始人の、或る生存を、進歩の必要條件がある。注  
意力集注後、起つたか、あつたか、原始人が、後物や敵を注  
視するに、意力と緊張態が、呼吸日減少と、顔面筋肉の  
緊張が、伴ふ。勝利者が、敵を、敵の前、立つ時、完全呼吸機  
関と顔面筋肉の、緊張が、起る。喜ぶと、喜ぶを、笑と、呼  
ぶ。ひら、我々が、必死の闘争後、勝利を得る時、又、  
狼の後、狼の獲物を、前、と、喜ぶ時、生理的に、自分の

及動が起るまゝう笑と云ふ、さんばスウリー氏に言つた、恐るゝ  
最初の大笑は、格闘の恐怖後、其人間が勝利を以て其交  
は戦勝を又出し、此時、其の人間が又二者は親の人間から  
現るゝ事があること、ロイド、モルガン氏に云く、嘲笑  
ハ、争人が敵を脚下に踏み付け、此時の狂喜をあらわし、  
そのことあること

右の如き観察點からして、老人ハ一層、児童の笑を解釋する  
が出来、児童の喜ぶから笑ふの如き、彼等は、唯叱責がある  
笑ふの如き、そんな彼等は、必らずあること、おふと云ふは、  
児童の笑、境あつての反応である、又喜ばしい氣分の表現は  
大抵、唯生理的ニ生活其物を表現する事である、笑ふ

何れも此がこゝろ、笑といふ特殊な筋肉運動を現すものと  
思ふハ、此は、種族の習性を導き出すことである、  
要するに、此は、原始人の狂喜した際、百の承認がある  
か、此は、原始人の流石に、其成り、其勝利、其栄  
其生活も反映する、スパンサーが言つた如く、笑ハ、刺  
力を一番抵抗のする方面、漏れ出したものがあること、  
笑ハ、汗の分泌

伊内忠彦ハ、パトウツのサイコロ、シラフ、レラクゼーシ  
ヨンを誤ると云き、種族して又の場、  
を初め、  
此等と、  
笑ハ、  
一月五日

の坊間：因由を漁り、バラツク居り左の一巻を得也

霞池省庵書問

附録共二冊

寛保七年の刊行 卷首：伊藤東厓の序がある、省庵の孫 安東素七の守經の上様の像も、

安東省庵より元彼の人の守約と云ふ所の  
末朱素秋の日本に亡命するや先づ此處に  
し此の事此人の事、常の日本幕府にお  
文上の累を害れ此に命者をおくは、擁  
護しそのつに、お戸も朱が守宮といふも  
安東の二此後を多けし六七年後の事にあ  
つた、安東も此の長い自家の忠告を刻ん

朱を保護し、安東省庵を朱と離る可  
きる因なり又一人物語を欠く奴、朱の  
本に未つて後、張豊と云ふ朱と同志の人  
が長崎へ来た、朱に命を乞ふことを許し、  
か因縁を之を許し、さうした、省庵も  
六兩積する能りす、志を遂げ、一人遊仙未  
五ひひ其を道し、此の年、前集を  
其の往後を編輯し、その事もある、霞池に  
張豊の難もある、此人もお印の事ある  
あつた、左：一福を給して、其人を好方辨  
せんとす。

海か途族祖候問

白頭宗孫里頭祀、お見天涯漢如西、或年憶  
別獨傷心、昔者蕭條向誰語、冰河消息只  
在空、充勇舞舞如波西偏、不成扶七入秦地、今  
日翻悲作魯運

此公附錄、有唐の朱彝如を祭るの長  
文を収む、六個唐の文、荒干を収む  
個唐の者唐の嗣子、少年早く文  
に長じ、父に代つて張斐を祀ふこと  
あり、亦常に其の文を張斐に示し、  
其の附録に収め、張斐の品性を  
評し、そのことあり

三代目守経の死後の柳、おに仕官し、七の代

○银杏樹ハ日本の誇りとしてある樹木の二つある、七と七と支  
那から入唐僧が伝来したことを傳くところ、支那の七は  
地方々々稀なり、ありてをえん、歐陽修の長、希の爲か  
多んとあり、支那の七を公孫樹と名づけし、  
孫の世すむる大木とす、ぬとす、長に、六、七、柳、柳  
とも名けし、あり、多り、大木のあり、  
を傳ふものあり、今、西洋より移植せんとあるが、此樹  
が精舎に有りしてあると云ふ、  
（平瀬伝あり）：伝へし、  
つ、樹扶ることあり、初めし、佛、  
一七八〇年、  
(Peking) (London) の記、  
(Peking) (London) の記、

此動ニ指んは時、植木也が苗木五株を不物してあるのを  
見るに比ぶるなり日本も物り行きたる銀杏もさきかき  
カレシの心、決して外もさういと誇つて居るを、惜みはれ  
のそ、ヤマトのこころ二十廿ギニー（我ニる六十田）に買ひ入り  
佛あり物りつに、佛國のさきかき此樹の親比と云ふもの  
北洋の中は植木を、後悔して二十廿ギニーを五本の價に  
一本の價があるといふと追求しては、思改にべら、ハヤ  
比後ひ及いさうといふとある、改陽修の詩に左の如し

鴨脚生江南、名實本相違、蜂囊因入貢、銀杏貴  
中洲、致遠有餘力、好身自賢、因令江上根  
結實、彝訓秋、始播種、三四、金蓮、盡、獻、疑、旒、御  
不及淺、天子百金酬、歲久子漸多、四葉、枝上、綴、玉

人者如客、賜我以投珠、情望若所從、葡萄在石欄、想  
日初未時、厥後其北伴、今已偏中興、離根及插頭  
物性久雖在、人情逐時值、惟帝記其始、後世知未  
由、是亦史官法、雲後徒續君、記  
え、由りて、支那の昔、一と、録、入、る、と、云、ふ、は、  
とせんと、こと、さ、す、り、

今般の客、大い、評判の、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
ニ、昔、も、米、松、と、云、ふ、枝、が、七、ろ、く、し、と、植、る、と、折、れ、ん、と、  
と、云、ふ、ある、耐、火、力、の、あ、り、て、耐、ろ、き、入、つ、た、り、と、術、術、  
ス、バ、カ、ケ、の、樹、(Platanus Orientalis) と、云、ふ、は、昔、の、  
溜、池、の、目、撃、し、た、の、と、火、子、の、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
花、ち、と、云、ふ、の、は、早、く、夏、菜、の、ち、り、と、と、云、ふ、は、



相と海昆キリとまのり根元を切断して放芽せしむ  
るが生長を促進するの培養法があるから此と云ふ説  
がある、皇室の御紋章に桐を模倣化したものがある  
のである、伊豆  
橋古く之を名づけて九重桐と命じてあるもの  
*Paulownia Mukado (St.)* がこれである、印方の貝など  
葉の椰子の葉に美しう任又そのを織物に用ゐる料  
とありである、此の財に葉が何んの材の葉とも知  
んきつた時合、日本に於ては(多羅葉)と命  
名して材葉がある、是れを印方の貝と命じて別種の別  
だが、これの葉を火の上で乾かしてあると焚物の物の  
にあら現りあるといふから余はこれである混同すべ  
し

いふが、

*Hex latifolia (Thunberg)* がこれである

これらの木の類は、あるところの、  
のこもこの葉は、飾りの無下すること、

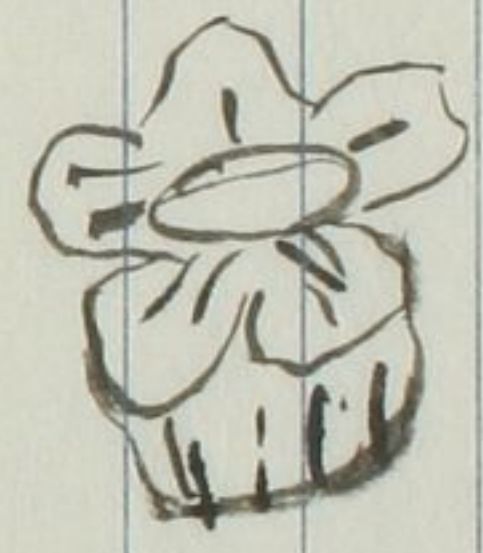
蜘蛛の分泌物が、  
蜘蛛の分泌物が、

見んは、織物の如く、味い、甘い、  
日下ると有り、嘗て金、  
南米の熱帯地方より、  
南米諸行家の記録より、  
滴り着るものと、  
樹の枝葉を、  
云いんが、  
こと別の、  
ふとの、

と云ふ常緑樹なり其の形貌甚に日本の松に酷似し  
多くは同種と思ふが、松の葉は對生するも  
はしりしいの葉あり生するもその心全く異つたものと  
あり、ちいへ (Teak) を望みしところ松曲の實をき  
良材なるが、其の重量の頗る大なるは、充分乾  
燥せざれば水中に沈むるの流んを故に、伐採  
先より樹皮を去り、五木の儘に枯らし、一兩年乾燥  
垂し、後伐採するといふ他材より重し元板するべ  
らんとする者あり、實は行はるゝものと、同種樹の葉を蒸  
溜して得る香油に、稀薄の酒精を加へて用ひらるゝ(以上林  
士上村勝彦材木活法の内を摘録す) 一月六日記

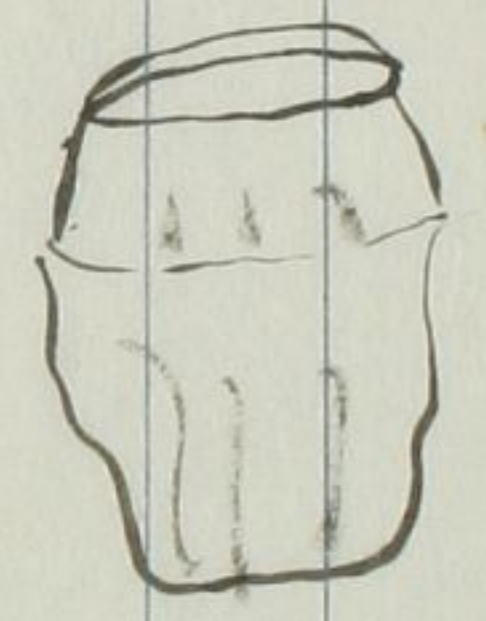
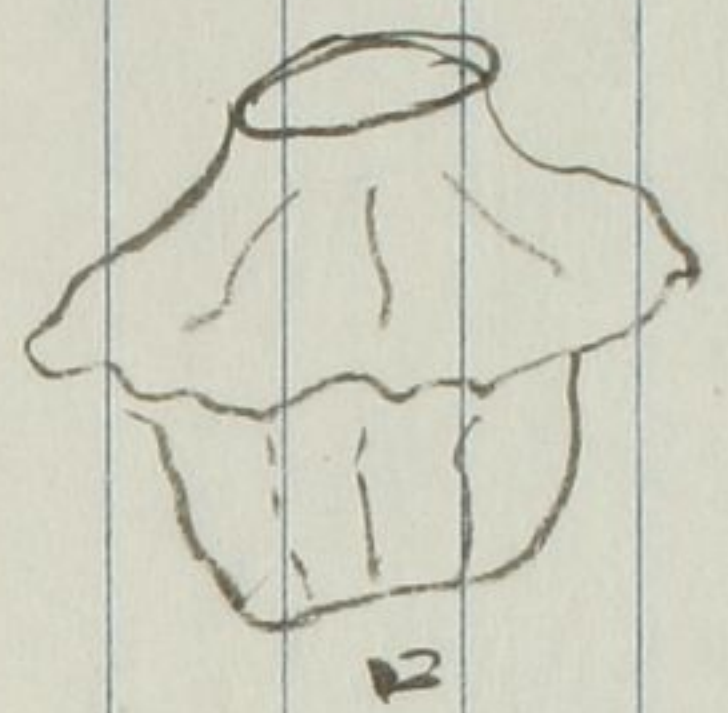
セウシ 琉球小笠原島の嶺に呼ぶ樹あり、名を(Sei-  
-onic excolba (BL)) と云ふ者ありしと、直徑三尺以  
上も達するは、其材軟くして、鋸を以て採伐する  
得べしと、熱帯地方にも此種の軟材のつくらるゝと知  
りし、西印が産の Cork wood) とも、若ぬるものと  
其比重は、栓用コルクの半分位といふ、此材を、海木  
用ひるは、舟にも用ひらるゝ、而して冷花産の材として  
最も可也、此材を、作らるる貯水器を、紐着に、松を  
盛るるの候、一内にも、氷の融解を見すと、椰子の  
實を、目撃するも、且つ大きく、種々彫刻するも、いづ  
くの異物と云ふこと、ハ珍らし、いづれも、南米の熱  
帯地方より、猿、鹿、砲丸、といふ、椰子の實を、比

八、管の形、球状と且つ大々く白蛇の器具の形を  
 したるもの、**猿壺**と云ふもの、蓋を有し、内より  
 丸い管の口をさし出すもの、**猿壺** (Monkey Pot) は玉苺菜  
 科の尾毛樹果を以て因のこき瓶状を為すもの多し



(一) (Decaythia)

*Crupulharia*  
**猿壺** (Musa) の果



二  
 寸の管の口を  
 さし出す  
 種を詳徑一  
 尺二寸高の寸

許表面より南瓜の如き小鼓あり、ハハ高七寸位上印  
 花を有す *T. tuberculata* の樹果より二七亦瓶  
 状より高七寸 *T. lanigera, Mart* の果より  
 此等々皆る殼の堅牢なるものあり、其の皮の  
 寸も種あり、おのづから蓋を以て之を脱出す、此  
 蓋は *Pyris* と云ひ、白蛇の蓋と云ふもの、人々の  
 用にするもの多く、砂糖を以て之を貯蔵す、猿壺  
 中のものを取出さんと欲するときは、こき瓶と云ふ物を  
 つのめ、手を出して、その口を挿し、乗して之れを抽出す  
 す由りて此名ありと、**砲丸樹** (Canon-ball-tree)  
 七回科の樹を以て之を *Couroupita guianensis* と云ふ  
 果は球状を有し、徑半許あり、**砲丸樹** (帶圓の)





を証することが出来ぬ

大正十三年一月七日記

二十世紀は比較的豊饒時代である。世界の穀多や果  
も残る。教育が普及し、国民的のも個人のものも、市場  
がより多し、平和を齎らざるは却つて平等を起し、イルビ  
シ、シヤツクス氏が「アドラントワソ、モンスリー」致した。政治  
戦あり、道徳に伴ひ、多の国民的富力の大増加のあり  
勃然として論じのり至言せしむる

今日人の歩調は路り速過ぎる故に個人も社会も七  
つとやつくり進んぬ。もつと深く呼吸しきこひさる

ぬ

フアレロは其著「古代羅馬人と近代米國人」に於て  
曰く、「人間は未だ當らん今日の如き不新に苦達する  
其奮状健て生活しは例り無の。然し古代人が生るる  
つて今日の世態を目標にせざるは、才と愛とを印  
象に、今や人類の苦難に比し、多難にあらう

吾人が必要とするものは、激烈に働くより、即ち  
産出の下に働くより、一層の緩和と、平均

と、相稱と油紙と違ふものがある。吾人はラスキンの言  
「此の世の世の世の大勢力を依りて成るものありしが、  
却つて此の世の世の世の成るものがある」と言ふ譯の意味を深  
く味はるゝていぬまゝぬ

今日の血肉活動が其のれ行くもの人百二取つて後  
余儀もあらず、之れ終向が近づくに征機がある。可し  
此の終向の式年か、先程を放つとするも、之れは  
滅せんとする。燈火の如きものがある。人間を頭腦の  
又も精神の先達とせ、此の頭腦を以て征服  
し、之を其の後にして、併し是等の富の此の世の富  
定らぬは身体の退化も亦あり

幾ヶ月前年有、是び三つを履ぬて居る生命の力なり  
初つて来た人なるや、今日の換入電車、自動車、蒸  
汽機、ハンモック、ある米橋あり、若くは米えり行く  
との思はんもの、若くは今や此の世の長き人百とするに  
併し坐つて居る人間が長くは有る得るか、とうんは  
格闘である、その道を人はキケンと行儀能く坐つて居  
るもの出来もの、此の世の支へる積るもの、漸次  
若くは凭ゆる形、その行くの世もある、又ハンモックは  
寝る、何れも運を頼るもの、けりしもの、重なる悪  
兆候がある、人百、長い淘汰の年右を經て、其の  
姿勢を得たもの、今や折角の姿なりを失ひ、いつ

てある

人間が日輪の照る可を眠る長夜の起つてゐる。朝の日光の起る原因は且結果である。生命を照らす朝の日光の二時分乃至四時分、晩の人工燈光の時分と現代へ見れば、人々が二時分早起きして、晩は二時分も早く臥床に入る。利益がある。日光の電燈も亦同じである。健康で康強である。併し現代の傾向を此の朝の起る二時分の変更を著し、早して我々を人工的起つて喜び、我々の子供は一層、夫れを喜び、ふてゐる。

現代の強烈な男性時代である。今世紀の神は、ジイ

オニサスである。吾人の「ポロ神」を名に取る。オニサスニサス主義の動機は、泰西の生活である。之を「ポロ」神を奉ずる。平均、油紙、ある等の精神を制御する事ハ出来まい。

ニ一千五云く、生理的強健こそ人々平安の唯一の特長の基礎である。今日の人間は、究古の家庭の如きものか、主派をうていあるか、併し相輔的であるか、耐久性を有つてあるか、其の大部分の遠の為り、安定性と耐久性の犠牲をせ、ある。



○熊鷹尾の不敬事件ハ内閣と総務廳をめぐれ、早稲田大  
学の神體をとり、其の巫漢が常々早大のちがひを流  
し、その籍を置い、ことあるから、但し此巫漢を出行  
し、ゾット前、違ふ、教を視聽が此の巫漢から得れ  
口供、青族院ニ於て、司法大臣ニ質問し、要旨を記す  
・總務廳してあるが、その事實を巫漢を二年、早稲田大  
学の意思があつた、と云ふ、何れも、若くして、巫漢が  
二年、入る、うら、と云ふ、二年、前、此男が、未、早大  
・その籍を置い、し、時、ある、其、何人の、董、師、  
大、中、も、と、さん、と、云ふ、氣、ある、うら、と、云ふ、  
油、を、流、し、旋、転、改、造、し、拍、け、ん、と、云ふ、休、む、と、云ふ、麻、生  
久、や、山、川、切、り、の、説、を、動、か、ん、と、云ふ、その、と、云ふ、休、む、と、云ふ、

早大講義のりあるが、海軍を、感、心、を、受け、と、云ふ、  
その、者、務、院、の、務、を、人、事、に、平、況、法、相、の、物、質、問、に、答、答、  
係、對、早、大、の、其、う、ら、と、云ふ、と、云ふ、と、云ふ、  
其、之、今、々、斯、く、の、と、云ふ、ある、が、早、大、の、可、同、院、を、就  
任、の、際、に、思、想、上、の、一、條、議、が、あ、つ、た、と、云ふ、と、云ふ、  
と、云ふ、と、云ふ、と、云ふ、と、云ふ、と、云ふ、と、云ふ、  
終、り、ん、の、雲、の、れ、ある、から、早、大、の、高、く、者、の、頭、を、  
ま、し、に、譯、出、し、一、條、議、の、院、長、の、如、き、と、云ふ、と、云ふ、  
辭、し、全、院、教、育、界、を、脱、走、と、云ふ、決、心、し、と、云ふ、と、云ふ、  
辭、せ、ん、と、云ふ、と、云ふ、係、し、矢、鱈、と、云ふ、と、云ふ、と、云ふ、  
世、界、を、誤、解、の、上、に、誤、解、と、云ふ、と、云ふ、と、云ふ、  
始、め、ある、の、を、輕、率、を、止、め、と、云ふ、と、云ふ、と、云ふ、

ORIENTAL NEWS  
DEC 22 1923  
Cosmopolitan Corporation presents  
MARDIAN THE WHITEST KNIGHT WAS FLORENCE  
The roman million setting zing  
Directed by Robert Vignola  
A Cosmopolitan Production  
A Paramount Picture



△四百年の昔、習慣と階級の幾多の關所によつて隔てられた或る若  
 キ乙女と、或る勇ましき若者とが奇なる戀物語である。文豪ゲー  
 マの戯曲に描かれた、時の英王ヘンリー八世の妹メリー、チュード  
 ル半生のロマンである。メリーが十六歳の誕辰を祝ひ、武術試合に  
 優勝するに懸け、騎士、チャールズ、フランドル、その日より二人  
 の眼を互に惹きつける。忽ち深夜、街頭に起る劍戟。四、五、ロンド  
 ン塔の危き消ゆる勇士の命、さて、十七世紀未業、武士道華やかに  
 美しき女、すべてこれ十七世紀未業、武士道華やかに

TOYOKINEMA

元セ物があるから、或る意味を、或る意味を、或る意味を、  
 と、或る意味を、或る意味を、或る意味を、  
 と、或る意味を、或る意味を、或る意味を、  
 と、或る意味を、或る意味を、或る意味を、

教育方針の立て直しを以つて奉仕することの方針を  
 取つた、是れ可と志き、此の世の暗黙の間に早大を危殆に  
 思ふことが、ますます盛んになり、その抜を今後、  
 儀の位、  
 ○旧服末から二、三、東洋キチマの、  
 を、  
 口モシ時代の、  
 大親、  
 趣がある、  
 今、  
 身が、

のオールド。フナツクス週間 至一月十日

フナツクス超特作映画

四古典劇 シーバの女王 十巻

遠きその昔、聖者ソロモンの全盛時代にバベルの塔に建てられた異教徒の王は、異教徒の手に苦しめられた暴政の王アムラフは、

シバの王國を其掌中に収め得たのに飽き足らず國內の年若く女達をも片端から

其力を以て征服した前シバ王の孫娘に

當るノミスと誘拐され辱しめられ、遂に

其身を恥ぢて自殺を遂げた。シバ人は此

暴虐を怒り、何時かは必ずアムラフを逐

すの時が来る事を信じて待った。

ノミスの姉シバは妹の復讐、國家の

復興の爲めに、燃え狂ふ怨恨の胸に秘め

て、アムラフに近付き、其

面談に誘われ、其報の至るや人民は立

つてシバ萬歳を絶叫し、怒ちにして復讐

の途に暴徒を起し、シバ王國を再建し

シバに女王の玉冠を捧げる。

當時アムラフの王者ソロモンは其廳

明々白日に於て地上に覇を唱へてゐた。

シバは民を治むるの知なソロモンに來

めやうと沙汰を横断してソロモンの宮

廷に至り歡待を受ける。其滞在ソロモ

ンとシバは何物をも燒き盡す様な強い

嫉妬、國家的執念、陰謀等の暗流がうづ

き、爲めに二人の戀は妨げられる。戀の

前には王位も權力も消え失せざるが、然し

ソロモンは隨處にオスマル身の者であ

る。彼はシバとの別を惜んで「金を

して一個の男子たらしめよ」と呼びまた

「王の位よ、汝憎き故に我はシバに

さ別れねばならぬ」と呪ひの聲を擧

げ、シバは寒がるい戀に瘠せ倒れた

身を抱いて歸國する。後一子を生み落し

グビテ命名して愛人の成人を無愛の

眼で見つめる。シバの愛は死

りも強い愛であつた。

箇中シバに仕ふる聖師の志士、可憐

なる處女、在好で陰謀家のソロモン王の

見、疾風の飛襲たる恐ろしい女等の各々

異つた性格が巧みに織込まれてゐる。



脚色  
フナツクス超特作映画  
監督  
ガエー・エルドレン  
原作  
フナツクス超特作映画  
カキア・フナツクス提供  
シバの王國を其掌中に収め得たのに飽き足らず國內の年若く女達をも片端から其力を以て征服した前シバ王の孫娘に當るノミスと誘拐され辱しめられ、遂に其身を恥ぢて自殺を遂げた。シバ人は此暴虐を怒り、何時かは必ずアムラフを逐すの時が来る事を信じて待った。ノミスの姉シバは妹の復讐、國家の復興の爲めに、燃え狂ふ怨恨の胸に秘めて、アムラフに近付き、其面談に誘われ、其報の至るや人民は立つてシバ萬歳を絶叫し、怒ちにして復讐の途に暴徒を起し、シバ王國を再建しシバに女王の玉冠を捧げる。當時アムラフの王者ソロモンは其廳明々白日に於て地上に覇を唱へてゐた。シバは民を治むるの知なソロモンに來めやうと沙汰を横断してソロモンの宮廷に至り歡待を受ける。其滞在ソロモンとシバは何物をも燒き盡す様な強い嫉妬、國家的執念、陰謀等の暗流がうづき、爲めに二人の戀は妨げられる。戀の前には王位も權力も消え失せざるが、然しソロモンは隨處にオスマル身の者である。彼はシバとの別を惜んで「金をして一個の男子たらしめよ」と呼びまた「王の位よ、汝憎き故に我はシバにさ別れねばならぬ」と呪ひの聲を擧げ、シバは寒がるい戀に瘠せ倒れた身を抱いて歸國する。後一子を生み落しグビテ命名して愛人の成人を無愛の眼で見つめる。シバの愛は死りも強い愛であつた。箇中シバに仕ふる聖師の志士、可憐なる處女、在好で陰謀家のソロモン王の見、疾風の飛襲たる恐ろしい女等の各々異つた性格が巧みに織込まれてゐる。

シバの女王の心算とシバの心算

ある、自今、思ふ、日本の、推ける、流、動、言、三、の、時、り、と、飾、り、  
 長、き、る、と、い、ふ、多、くの、場、合、三、時、り、乃、は、四、時、り、に、及、ぶ、こ、と、  
 が、差、あり、考、量、を、要、す、る、事、業、者、の、入、場、方、を、ま、る、打、  
 算、や、邦、人、の、習、慣、と、豊、富、の、献、主、を、要、す、る、換、り、の、事、  
 長、時、り、且、つ、所、以、ち、也、あ、る、が、時、り、を、二、時、り、と、限、ら、し、  
 たい、時、り、の、長、い、の、ち、中、毒、の、本、心、あ、る、洋、會、の、四、散、を、半、減、  
 せ、し、たい、と、欲、す、る、こ、と、同、い、感、が、あ、る、こ、の、お、け、な、い、  
 亦、映、畫、の、概、要、を、終、り、と、す、る、

一月十日

の十レとサスと云りれる海と云りたるサスと美り年  
 が舟中の美人の顔を見ても又とんち 湖屋しこい化して  
 乃仙と云りたと云らん 日本の福壽をある可憐の女  
 七神が不幸も土龍の神の嫁かぬ 哀れも自殺を遂げ  
 是れ其の如く出ししとよとアリス土人の口へ傳へん  
 あるをいぬく来んは 海原もさく多くの事定かある深  
 法は何んも個に知る神話があるゆへに 政罪に法を  
 七多々あるしるる 於て西洋の花Language of flowersと云ふが有る  
 ありとらんわ 本舞踊又る代へて花かい男女のあり  
 行ん比謎の類に記す類ひあるけんとも多くい神話  
 伝来してある花の形や美態にさう去るを究し悉  
 の成るや種々人の言柄を表すの類ひある例はついに

花の語と云ふ

も傳音、以即おの二義ありし、やくちげ、る危険、  
まの義ありとし、やまも、に致訓、つけに禁慾、  
美不妻の義ありし、けしむぬに仲夏の義ありけ  
ハ俄然たる美人をあらし、さるすなり、  
るい、あんとあゝる花や折る、  
も実海、交際社会、使用、  
花を活材、利用し種々の侍従が附随し、  
説と尋人、比喩のと謂ふべき、  
一月台録

○享保五年武州の遠守郡草津と云ふ人の著  
ハレ酒説養生論と云ふ七冊本を贈ふに、こんど  
稀なる本心ある酒の言と醫術説から斯く七冊と云  
つて繁説したるもの恐らく他にあるまじく、徹頭徹尾酒

ハ悉いものなる、支那の者藉る教元してある酒の  
風味を存するは、酒の言と醫術説から、酒の言と  
と曲解してある、漢方醫の酒説を一向に取らざるは、禁  
酒令ありの宣傳たるに屈竟の心あるものなる、未  
酒毒を洗する程りの方劑、酒を垢とする特效あり、草  
木皮がいろいろ分けてあり、自合する酒の風味から酒に  
関する因を轉じて、酒の關係上、コンナとの關係を  
此處の如きも、全に自合の風味に及ぶものなるが、他  
山の花より、草中より、コンナとの一部あるもの、  
あり、

○曲亭馬琴七部心初陣より、レヤレ本をいくつ、青いとも  
、晚年の馬琴の著るを、街つて、いことを書いた



ぬ、大体の格も馬の心の中をヤレ本と重きを揚ぎ  
きむろのが、アソナ男が一旦を通を振う回し  
とマンガラ興か無いむろの、此一冊の馬の心  
得比、その世の口緒尾形と云ふ酒後本、年代不  
明だが葛尾を記し行してある、各論新書の刊行に  
改題の要りあり出し、此の、執向を一切呉服に取  
り、その格も種々様々をとりてある、首飾りと大丸の書  
類が合本、其の明をいふと婦人の云ふ、固かあるも  
う、頁を違ふを必らず各頁の上段を劃して元時  
の輪廓を固し、染布や紋所をも、酒後本と云ふ  
例へば、無地、持ちしもの、紋所はつこひの抱の  
不り、と云ふこと、素い娘の男が、いふこと、  
くどく所をお代ひ、見せ

ん、固かあるといふ、格も、いふ、の、病や世  
格を深、お、并、格、を、い、格、を、い、格、を、い、  
の、あ、い、格、を、い、格、を、い、格、を、い、  
の、自、分、の、い、を、い、格、を、い、格、を、い、  
の、一、定、も、あ、い、格、を、い、格、を、い、格、を、い、  
の、可、あ、い、格、を、い、格、を、い、格、を、い、  
の、を、い、格、を、い、格、を、い、格、を、い、  
の、各、首、も、い、格、を、い、格、を、い、格、を、い、  
の、の、の、場、合、に、格、を、い、格、を、い、格、を、い、  
の、格、を、い、格、を、い、格、を、い、格、を、い、

●安政度の地震火災を録し、其の書物の  
あつて、程々、あ、い、格、を、い、格、を、い、格、を、い、



を依りて... 卷五と云ふ... 田に、價を... 北方を披う... 僅... といふ... 府志行記... 北三書...  
を依りて... 卷五と云ふ... 田に、價を... 北方を披う... 僅... といふ... 府志行記... 北三書...  
を依りて... 卷五と云ふ... 田に、價を... 北方を披う... 僅... といふ... 府志行記... 北三書...

一... 府志行記... 北三書... 一... 府志行記... 北三書...  
一... 府志行記... 北三書... 一... 府志行記... 北三書...  
一... 府志行記... 北三書... 一... 府志行記... 北三書...

らあぬいふ事集るる 震火、次くの大災多を記したるもの  
し一版の便あり、凡そ大災を一回して記す或る形を  
あつて續出するに記さるる、去年の震火、次き亦  
此何事なる災禍の記、ことなきや、あ政災禍志を撰て聞  
心せざるを得ずと云ふ

一月十日夜誌

あ政三年の風を他程強、うしと見え、江戸  
むとヤツト地震をせしむる、家々の樹の、震  
災、弱いまう比家屋が潰れ、比とあるや、  
本龍寺の別院や其他、念おふ大なる、  
比、倒壊、比とある、鳥が群、をうし、死し  
比、ことなきとら、因、うらうてある、本龍寺の屋  
根、うら、瓦をふり、ある時、群、衆が、年、から、手

又移して運ん比のむ、ド、リ、採、え、つ、比、と、ある、む  
田、こ、る、て、比、ら

○長崎紀行と署して文化と出版、え、比、一、巻、を、兵、居、の  
長久保、あ、あ、の、長崎、行、後、日、記、を、お、く、署、し、比、の、比、  
の、和、年、う、り、亭、隆、の、函、氏、が、難、風、む、あ、南、を、て  
漂、海、し、比、の、を、先、方、か、ら、日、本、へ、送、り、傷、け、た、ま、え、を  
受、え、り、又、兵、居、の、役、人、が、長、崎、へ、出、張、し、比、時、赤  
あ、七、其、一、行、ふ、か、つ、て、初、め、を、長、崎、の、兵、士、を、見、比、記  
と、ある、巻、首、を、掃、お、の、奥、田、三、角、の、序、が、あ、る  
其、内、の、跡、を、し、く、感、し、比、紅、毛、や、カ、ラ、の、人、扱、や、其、  
其、の、因、を、む、七、枚、の、を、あ、り、て、著、者、の、記、り、と、い、わ、る、  
と、外、来、文、明、の、品、を、お、尋、ね、む、と、云、ふ、巻、を、う、と、する



軟うい方面のしつとまじい目が痛くぬ、今日旅の村に  
 おるの田中親美の手む心つたのふ干数歌集  
 まつしめ比多く依て本位紙が巻謀とまうつて  
 物しとまひあるがやうき堅いよむ内原湖南が  
 巻謀とまう且つ解説を心つたのふ加つてあは、今左  
 りその目録をよきつけとせむ

千里集 一帖

躬弦集 小一帖

○ 巻紙巻集 二本

○ 杜家三成 一本

王勅集 一本

樂教論 一本

行成古今集 一巻

内裏和歌

資通の家歌合 二本

○ 聖武天皇宸極集 一本

後醍醐天皇集 一冊

行成所詠集 一冊

日くし帖 一帖

清正集 一

節切古今集 一

○ 南京遺文 解説 二

○ 古今集本阿彌切 二本

○ 光悦書信本 二帖

の 紺色紙

一帖

以上の内、と附一帖のものに望い、その紙を考へるもの  
である、やうと云ふも、常目にして、よも七あるが、八九分  
あり、初めと云ふものあり、月うけ帖や、十帖、尾  
巻紙、その紙を加いつて、その紙、何れも天下に名  
高き若品を織細に、被求る、その紙、紙七紙紋  
七、装隠漢七す、その原本を換してある、解本と取  
あへず、右の四帖一を、贈ひ入る

南東遺文

光悦活本

古今集本河内切

紺色紙

南東遺文とは、木竹紙が、若くは研究の、その、  
の材料として、上代の文書を、海峽に、内、三十種、覆  
巻、そのもの、ひま、く、山、今、流、又、若、心、あ、  
冊、と、う、て、紙、紙、ま、く、む、か、ん、て、あ、  
福、田、の、尾、も、古、文、書、七、一、枚、入、り、あ、  
光、悦、自、筆、と、見、る、心、せ、よ、の、心、あ、冊、の、尾、に、光、悦、の、印  
を、捺、し、極、め、に、細、字、を、書、い、て、あ、  
長、の、帖、の、一、冊、は、横、書、の、帖、に、あ、  
その、手、に、捺、本、を、あ、う、  
野、路、古、今、集、と、所、謂、本、の、  
通、切、と、う、の、心、か、  
尾、と、白、と、透、き、分、つ、て、あ、  
横、書、と、横、書、と、透、き、分、つ、て、あ、

紙名の美らさうらうらとすらしもさうの、継色紙を縦摺り、  
四寸許の帳に洒脱る布一疋を、出いれ味を真に配せ、  
紙のすき、愉快さうらうらある、ある、購へば、  
この内、二三進す可らざるものがある、ゆゑ、  
入手を約すといふ

一月十一日記

成金達が、お金を、自慢、縮字して出版したとの  
いふ、さういふ、一冊ある金を、うけ、  
るが、此種のもの、多く、  
て自家の年賀を、  
のこと、  
吐の種、  
内、

紙類が、此類の、  
の、  
場、  
わ、  
何、  
と、  
リ、  
ど、  
ら、  
冊、  
し、  
ハ、

善隆院の古墨蹟を復元し三溪集と  
名つけて出版せんと常夏山院が数年かゝりて凡そ  
版の出来比が零火亡び比とややくが、これら高  
田の心算集の類は又法道（宋化子）あり

○依：木信宿を長らく兼藤完之没後して漸  
やく得れり（？）を以て比者（？）が大寺の火災亡  
び比が依：木が南京遺文の附書に言ふてある所  
を援さんいくら研究しても解（？）ぬる所あり  
ちい、あめの人か精確なる比本ゆえんか、  
決するてあろうが別産ソナナとのとるの、依りてあめ  
着る、あめは山々の時代の文書や金石文を以て断  
片的、あめと言ふを以て拾うの集めて研究の資

料とするおのきといふは、これに依りて文者たる  
の由は物々著る、好むもの老るてある断簡を  
瑠璃瓶に貯り、比の南京遺文の比があるが全  
石文として取つてあるものと佛足石の比の振本の  
みがある、比の比あるもの三十九（？）比、其内は資料  
不足のものがあるところ、大海に一砂を拾ふ様  
にありある、備し、幼くも、比の採集を  
かゝりて多とすんせひある、比の遺文の首端は  
せである、比の正公院文の由、天平勝寶元年八月廿  
八日、比漢字、比背短歌である、比文者たる比の  
七一首の和歌を傳つてある、比文者たる比の紙  
の数を比を比し比の比あるが、比の比面は別集





むすむす、太田錦城の子に多大の功を著せしこと、  
中村佛庵の傳説を湯澤佐末、典古の秘笈の如く、  
典古の秘笈の圖志、考證より三四おもしろきものあり  
の前者ありしを、録し以て、正倉院佛物の複製本  
二巻を贈ふ

一 聖武天皇宸翰施集

一卷

一 光武天皇宸翰施集

一卷

二書に東大寺藏物帳の附記を、石燈下の藏書と  
現存するもの、雅果、白麻紙、紫檀軸、紫羅襪、  
帯、此の書もすくなく、模写、此書おもしろ  
六相階層の集、中にも佛あり、漢詩あり、詩文  
を、おもしろく、天平三年九月の書

りとなり、此書に、ぬめんと、詩文と、今と、  
なるものあり、漢果の文、献と、補の、  
と、すくなく、漢果の、正格、  
目、耀、如、く、皇、后、の、樂、教、論、の、  
沈、着、の、政、あ、ん、と、も、  
本、の、首、部、あ、く、  
全、部、四、十、七、張、  
の、解、説、と、附、き、  
皇、后、の、御、筆、  
也、日、常、  
此、に、  
あ、れ、も、  
杜、家、と、

皇、后、の、御、筆、杜、家、立、成、を、具、す、と、杜、家、立、成、  
也、日、常、  
此、に、  
あ、れ、も、  
杜、家、と、

有書ありやと由は湖南の致也、皇后の沛也、此  
外に樂教論あり、此の墨之中に及ぶ、筆力能  
健うと婦人のかゝるを稀有のものなり、唐人の  
交わりし、希し難きの概あり、各條目に積善善家  
の印あり、内家私印と刻法同じ  
此二者の一部の換言せん、その好む家言、海布する  
七の無き、あゝとて、全部原形に換出せん、  
こゝも如めとす、杜家立成の用あり、白黄、赤、藍、  
五色の麻紙十九葉を、造き、  
大正十一年二月  
出版：佛う施集る二十、杜家立成三方部刷行し、  
このみとす

日若く三日、熱海に赴く、  
道不便のなる、  
海に移り、  
道の記を日記に載せ、  
二三を爰に記す

此の初めに西府、  
ハ城の余を待つ、  
里須房、  
岸ぐ、  
際と此四人、

か、と爰に偽託其史の念をさす事ありと、酣酔の後  
は内余と其の別荘に拉し去んとせしが、此夜を待て  
余亦ゆと夜半に沛し、死する望も相六時を過  
らざる迄、志のふ大震ありて一撃を喫す、余等のを  
三階に在るを以て、ぬき出る能はず、一時狼狽す、幸  
くして別荘より續記の録を七廿甚に欠るるを以し  
が、余を前夜想ひ出し、このことを再び繰り返し、どうも  
吾くが害つり集まんば地震か起るとのたとえを  
て笑ふ、拙を此地震も、関東、東海、東山、東  
海をさすしか、或る関西、西海、東海、東山、東  
海の交るる、差支らざるや、或るのうく、或る  
うて試み、電報を東京、通せんとして、不<sub>レ</sub>也

電候も亦因に、益々不安なるを、幾時、此令らるる  
が、正午、次第漸やく大略を、東京と左巻の被差  
す、横濱と東京とも、別々、西行、東行の汽  
車、と、津、鎌倉、武蔵野、長曾加、西行の  
汽車、数、電報、の、報、知、り、  
此夜、高田、黒須と、道、邊、方、に、招、え、ん、行、き、小、室、あ、り、臨、む  
余、酒、次、敷、ん、と、云、ふ、姓、年、を、等、三、人、執、行、  
る、時、末、比、銘、と、別、れ、る、別、荘、を、名、を、次、力、さ、る、と、云、  
ふ、一、執、行、方、は、代、り、浅、う、ぬ、海、を、深、き、  
る、ん、ハ、三、人、共、同、の、別、荘、を、危、ん、と、云、ふ、二、三、回、其、地  
を、相、し、る、こと、も、あ、り、し、が、  
又、二、三、回、別、荘、を、危、り、な、さ、る、と、云、ふ、大、き、な

莊とお村<sup>ふ</sup>あすま<sup>ふ</sup>り、あめ<sup>ふ</sup>の道<sup>ふ</sup>道<sup>ふ</sup>り共同別  
荘とあす<sup>ふ</sup>し<sup>ふ</sup>共同墓地とあめ<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>葬<sup>ふ</sup>を笑<sup>ふ</sup>ハセ<sup>ふ</sup>こ  
とあす<sup>ふ</sup>、あめ<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>葬<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>悲<sup>ふ</sup>ひ<sup>ふ</sup>た<sup>ふ</sup>し、今朝<sup>ふ</sup>の地<sup>ふ</sup>震<sup>ふ</sup>又<sup>ふ</sup>長<sup>ふ</sup>寿<sup>ふ</sup>  
三人<sup>ふ</sup>傷<sup>ふ</sup>つ<sup>ふ</sup>こ<sup>ふ</sup>もあ<sup>ふ</sup>つ<sup>ふ</sup>らん<sup>ふ</sup>と、共同墓地<sup>ふ</sup>又<sup>ふ</sup>葬<sup>ふ</sup>  
えん<sup>ふ</sup>えん<sup>ふ</sup>、幸<sup>ふ</sup>ち<sup>ふ</sup>う<sup>ふ</sup>し<sup>ふ</sup>と共<sup>ふ</sup>に<sup>ふ</sup>笑<sup>ふ</sup>ふ  
三人<sup>ふ</sup>の熱<sup>ふ</sup>海<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>す<sup>ふ</sup>ことと極<sup>ふ</sup>め<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>稀<sup>ふ</sup>ん<sup>ふ</sup>のこ<sup>ふ</sup>とも、<sup>ふ</sup>属<sup>ふ</sup>  
ん<sup>ふ</sup>ん<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>道<sup>ふ</sup>道<sup>ふ</sup>の庭<sup>ふ</sup>園<sup>ふ</sup>に<sup>ふ</sup>三<sup>ふ</sup>友<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>す<sup>ふ</sup>と日<sup>ふ</sup>撮<sup>ふ</sup>り<sup>ふ</sup>他<sup>ふ</sup>り  
の記念<sup>ふ</sup>と<sup>ふ</sup>り、道<sup>ふ</sup>道<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>眼<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>懸<sup>ふ</sup>す<sup>ふ</sup>和<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>こ<sup>ふ</sup>え<sup>ふ</sup>  
志<sup>ふ</sup>す<sup>ふ</sup>す<sup>ふ</sup>れ<sup>ふ</sup>に<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>さ<sup>ふ</sup>ひ<sup>ふ</sup>け<sup>ふ</sup>り<sup>ふ</sup>君<sup>ふ</sup>も<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>ん<sup>ふ</sup>と  
心<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>め<sup>ふ</sup>し<sup>ふ</sup>う<sup>ふ</sup>り<sup>ふ</sup>死<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>ん<sup>ふ</sup>と<sup>ふ</sup>も  
ま<sup>ふ</sup>に<sup>ふ</sup>此<sup>ふ</sup>塚<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>こ<sup>ふ</sup>と<sup>ふ</sup>し<sup>ふ</sup>

道<sup>ふ</sup>道<sup>ふ</sup>余<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>日<sup>ふ</sup>醉<sup>ふ</sup>態<sup>ふ</sup>四<sup>ふ</sup>十<sup>ふ</sup>数<sup>ふ</sup>年<sup>ふ</sup>前<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>ち<sup>ふ</sup>年<sup>ふ</sup>時<sup>ふ</sup>代<sup>ふ</sup>と

異<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>か<sup>ふ</sup>こ<sup>ふ</sup>す<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>例<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>鳥<sup>ふ</sup>羽<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>終<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>業<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>振<sup>ふ</sup>る<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>吐<sup>ふ</sup>  
嗟<sup>ふ</sup>成<sup>ふ</sup>ふ<sup>ふ</sup>口<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>開<sup>ふ</sup>く<sup>ふ</sup>き<sup>ふ</sup>論<sup>ふ</sup>議<sup>ふ</sup>し<sup>ふ</sup>予<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>送<sup>ふ</sup>り<sup>ふ</sup>う<sup>ふ</sup>と<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>ら<sup>ふ</sup>余<sup>ふ</sup>也<sup>ふ</sup>  
横<sup>ふ</sup>臥<sup>ふ</sup>す<sup>ふ</sup>こと<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>め<sup>ふ</sup>う<sup>ふ</sup>う<sup>ふ</sup>余<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>傍<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>ま<sup>ふ</sup>せ<sup>ふ</sup>う<sup>ふ</sup>と<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>ら<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>  
あ<sup>ふ</sup>ら<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>め<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>右<sup>ふ</sup>例<sup>ふ</sup>又<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>ら<sup>ふ</sup>と<sup>ふ</sup>里<sup>ふ</sup>須<sup>ふ</sup>也<sup>ふ</sup>四<sup>ふ</sup>嘉<sup>ふ</sup>お<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>く<sup>ふ</sup>お  
顔<sup>ふ</sup>青<sup>ふ</sup>なり<sup>ふ</sup>余<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>記念<sup>ふ</sup>と<sup>ふ</sup>り<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>ら<sup>ふ</sup>ひ<sup>ふ</sup>受<sup>ふ</sup>る<sup>ふ</sup>日<sup>ふ</sup>く<sup>ふ</sup>道<sup>ふ</sup>道<sup>ふ</sup>と<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>ら<sup>ふ</sup>  
終<sup>ふ</sup>る<sup>ふ</sup>人<sup>ふ</sup>物<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>す<sup>ふ</sup>こと<sup>ふ</sup>巧<sup>ふ</sup>み<sup>ふ</sup>る<sup>ふ</sup>こと<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>ら<sup>ふ</sup>ん<sup>ふ</sup>ら<sup>ふ</sup>當<sup>ふ</sup>り<sup>ふ</sup>人<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>  
嘴<sup>ふ</sup>に<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>ら<sup>ふ</sup>ん<sup>ふ</sup>え<sup>ふ</sup>と<sup>ふ</sup>誰<sup>ふ</sup>ん<sup>ふ</sup>も<sup>ふ</sup>嘴<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>ら<sup>ふ</sup>ん<sup>ふ</sup>み<sup>ふ</sup>つ<sup>ふ</sup>こ<sup>ふ</sup>る<sup>ふ</sup>感<sup>ふ</sup>  
興<sup>ふ</sup>に<sup>ふ</sup>乗<sup>ふ</sup>り<sup>ふ</sup>て<sup>ふ</sup>は<sup>ふ</sup>り<sup>ふ</sup>たり<sup>ふ</sup>こ<sup>ふ</sup>

道<sup>ふ</sup>道<sup>ふ</sup>方<sup>ふ</sup>に<sup>ふ</sup>寓<sup>ふ</sup>す<sup>ふ</sup>る<sup>ふ</sup>四<sup>ふ</sup>言<sup>ふ</sup>、一<sup>ふ</sup>日<sup>ふ</sup>去<sup>ふ</sup>書<sup>ふ</sup>三<sup>ふ</sup>味<sup>ふ</sup>こ<sup>ふ</sup>日<sup>ふ</sup>お<sup>ふ</sup>息<sup>ふ</sup>す<sup>ふ</sup>方<sup>ふ</sup>  
道<sup>ふ</sup>道<sup>ふ</sup>前<sup>ふ</sup>に<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>ら<sup>ふ</sup>ん<sup>ふ</sup>枝<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>花<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>挿<sup>ふ</sup>り<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>ら<sup>ふ</sup>、み<sup>ふ</sup>つ<sup>ふ</sup>こ<sup>ふ</sup>色<sup>ふ</sup>紙<sup>ふ</sup>に<sup>ふ</sup>  
寄<sup>ふ</sup>せ<sup>ふ</sup>し<sup>ふ</sup>て<sup>ふ</sup>成<sup>ふ</sup>ふ<sup>ふ</sup>こ<sup>ふ</sup>ん<sup>ふ</sup>道<sup>ふ</sup>道<sup>ふ</sup>花<sup>ふ</sup>舟<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>寄<sup>ふ</sup>せ<sup>ふ</sup>は<sup>ふ</sup>こ<sup>ふ</sup>余<sup>ふ</sup>が<sup>ふ</sup>ら<sup>ふ</sup>  
ひ<sup>ふ</sup>受<sup>ふ</sup>け<sup>ふ</sup>家<sup>ふ</sup>内<sup>ふ</sup>に<sup>ふ</sup>進<sup>ふ</sup>つ<sup>ふ</sup>人<sup>ふ</sup>と<sup>ふ</sup>り<sup>ふ</sup>道<sup>ふ</sup>道<sup>ふ</sup>又<sup>ふ</sup>三<sup>ふ</sup>四<sup>ふ</sup>枚<sup>ふ</sup>和<sup>ふ</sup>紙<sup>ふ</sup>

を揮毫し示し切とも画を試む余の家は遠の  
幅一七無けんハ装漢家と傳く人もおち垣の  
巻紙に好しき和紙云々

上の代紙人にとちてし木にとちて酒女

椿とちて多いろいりあうも

ちかき山又雪とあはれや常春の

熱海のまゝもゆけまゝの海

美清のおひこちこころ木の實

あはれいふまじしもおさる

あはれいせしをおひつる

北木のあえゆりこころ一惚えりして

山椿るるいとちるかーも

山椿さけるをえんばゆきとと哉

をさるまこときを神の代をおとる

よ切一とと危前美を脱し椿の樹を畫

したの糸をぬす

わう軒おや勢仁王よとちえん、海

る年柿の姿おこりーも

アう、アの神話うあうにニクスと火に焚けてある

年後、更生すといふのを震震尖の大火に露り家を

貴ひなど友人の需て産しぬき並つてるとそのをさる

せんおとーりしころんもぬきんととて、昔うとれ

るかあのおちりうと出来たり、画柄も鳳凰の

上室に飛翔する状を畫し、下に火談の上上るを回

す其の野に云く

亞刺比亞之野有雲多名曰比尼基或譯作  
鳳凰羽毛紫朱色帶金光每五萬年自火  
化而更生故以為化之即生之象徵

ヒニックスと Phoenix 云々、これを震火と通用し  
思ひつぎぬ人の為め画し其の左の和歌を  
認めらると云ふらんやと左の如し

何らひゆふあふそふの力をやきと  
いもくわいきかへる君

道邊の危ふ二大老柿ある骨幹彫割甚偉き  
急為り家を變柿舎と名つけ、柿をめぐり甚し  
柿を採し多多くの和歌の内

若ふよき赤き雲七もみちよき

冬とてこころ柿をあらうき

道邊方にある河余七つくのよき柿を採し中よバ  
ラックの内は頼む掲げ、熟面の柿を採ると頼む

鶏犬回公同一株

と方きぬらぬ此の田園生活の状を云ひたるんは移して  
バラック生活に用ゆるを得べし、又一妓書を採ふ名を問  
ハキールと云ふ即ち

奇思

の二字を異う

道邊邊ぬんび世態喜ぶ多しの柿を採むるんを  
地淵の句と云ふ An Longa vita brevis (but is long



弟美より聖武帝家持るものよみうに冬の  
梅の影あり傳をぬす

比雪の晴ぬ梅の影いといふ春

家持

山はちをまの雲の照るも見え

たろえ那と定えそん花とくは雲あそく

聖武天皇

披に雲あんといふ雲美の木

此等五何地よりやしぬう分岐さう南都を成

候真々梅の雲いあそくさるべし

○此海町教業中 寄あそく知る印鋪古巻に立寄の石見  
の陣列の古玩をいやう一見んも云ふ人あそくあそく終  
こ片陽ある園出れをうと換さるん石高の刻し印を  
捺して小聯とす二幅してさるものと寸珍巻一と獲と嫌

ふ寸巻を

珠石の印あそく何人さるる未詳のさるる

の花弁を画す寸尺余の雲の三尺に高ひ画も亦拙さるる石高  
の聯を一酒春秋を分刻し一雲心飯を分刻し用紙の輪  
廓凡流し刻も亦可也、越海に此等のものと車東の廣  
の三分一に得るを意あそく、次日亦あそくと此に此に別  
り六漁ふ此のふ久く得んことを得んし車東と年入ら  
ざる印講一巻を得たり、印北沼魚戯」と四着しなるもの  
老郷四世田の安田幹伯の文政年間日谷琴峨其他の里  
の某の教人受蓮説を分刻しなるもの、巻は二丹羽  
思亭の序あり之れを書するもの余か一族中崎春(原山)  
さる、余之れを得るまにふ甚し、蓋し余か架中のおも印  
講具のふ、而して御田の人の手成るもの察りたり、是れをさる



第中の類く可らざるものも併れ熱海のことを地を得たもの  
事也此處に久しい前も八巻の寸珍法華經あり所謂胎内  
經と云ふものも余が第中一二行を卷す故を以て余熱海  
にありぬ之れを目を焼くを購ひず今も夜を購ひ入る  
坪内~~の~~別在の佛壇を置く事し余が回家に宿したるに  
合とす也

○道遠か若しは~~の~~枝用~~の~~脚本と云ふ一冊は四聯未早編の出版  
部~~に~~刊行~~の~~物たるも余いまだ見ず及心ず、悔あるに於し  
て一夜後とす此の冊中に「太田道灌」の事を書き置きたる女  
り、これを大隈令儀と悦量初を信え折に用ひんとせり也  
也道灌は因幡守山吹の里に近き早大附也、道遠  
が特~~に~~道灌を書き置きたるに因幡守ありが故也此の道灌

割の故向と紅血鉄血のことを云ひ居んば馬琴の四々御談と  
ハ同じく、四々御談もこの御物修と云り、鉄血の花を妹に  
妹の名鉄血を姉に其くはる故向を主しおんは、道遠の  
山吹の花を出し給姉(実、紅血)が終に道灌の妾とす、  
とを取つて居る、道遠の修と云うに、道遠の早大書也  
うと云と離れぬ、西向天神と云ふ古祠あり、  
基の枚碑あり、傳説に紅血が道灌被傷に心とす、  
るも、  
障の妾とす、  
への泣きを、  
の作と、  
心算り、



○西人の恋愛の詩、其故は支那の俗と同じであるが、言葉  
が異なるとおのづから別種の詩情を味へ得る積である

also a sweet Hell it (Love) is

and a successful Paradise

又、テスレリーと云く

There is no love but love at first sight

○現代の美術家は皆筆を走らす者とする中、唯  
れ二三人も筆を日本紙の界隈に居る者あり、其の  
かあると云ふ、其一人は、井原屋、其の筆は、  
の筆は、其の紙を摺る、顔料を心と云ふ、偶々  
風の吹く、此の如きと云ふ、左の記すがある

これ、い、屋敷を移し、其、度、毎、日、梔子花、一、株、を、摺  
へ、運、ん、ん、色、を、植、え、る、者、は、花、を、賣、る、者、の、は、か、り、に  
い、る、の、其、実、を、採、り、て、之、を、用、ひ、て、其、紙、を、摺、る  
顔、料、と、す、る、者、は、あ、る、梔、子、の、實、の、毒、を、取、り、て、  
け、破、ん、と、す、る、時、は、其、年、の、冬、七、忽、至、日、に、近、い、時、節、に  
ち、ろ、の、心、ある、傾、き、易、き、冬、の、の、色、に、時、を、い、そ、く  
小、倉、の、貯、り、と、い、ふ、き、つ、梔、子、の、實、を、搗、み、其、粉、  
お、焼、の、下、に、凍、る、手、先、を、焙、り、ら、う、と、破、ん、ん、土  
錫、に、い、ん、を、煮、る、時、の、い、い、か、が、お、き、け、り、其、汁  
を、絞、り、摺、つ、に、原、紙、を、摺、る、者、を、摺、る、時、の、心  
に、此、の、心、い、ん、法、術、を、い、ふ、と、い、ふ、人、々、と、い、ふ、心  
の、間、事、に、あ、る、一、の、彫、刻、の、苦、推、敲、の、難、屢

人として長大息を漏らさずありかたあり

○此年ねて海と遊んじ時、師重の筆に成つて天和の熱  
海の圖の覆刻をえ比の考つてあつたから二三枚購  
ふ比が、そのは内方、元禄八年の熱海案内記を見  
て天和の時代より降んとも案内記と珍らししい具つ  
たんと覆刻をいさう、南時の初掲本もある、半紙本が三  
四十枚もあり、圖も入つて居る、挿入の地圖を換するん  
うとハ、あつてあるが、木俣甚しいお事、そんを巨類  
の察、疎の差、大体甚しいお事、ハ、熱海も、えんか  
らかい、と、と、変、い、の、と、あ、織、道、そ、と、改、ま、ま、の  
と、あ、所、が、あ、る、ふ、身、此、年、の、震、災、が、海、岸、筋、と  
海、浦、と、さ、ら、い、れ、て、其、一、帯、と、家、屋、の、皆、海、と、な、る、と

熱海案内記



訂正伊豆熱海溫泉泉場全景圖版



Vertical text block at the bottom of the map, likely a legend or index of the various locations and features depicted.

所刷印原製寫金山群 地番三廿日丁三町歸區田神市京東 所刷印

所有權

大正三年八月廿七日  
大正三年九月一日  
大正六年八月十五日訂正  
大正八年十二月一日訂正  
大正十一年一月廿日訂正

發行所 熱海溫泉泉場取縮所  
特設電話熱海七番

代表者 內田市郎左衛門

印刷者 菅野久  
電話東京神田三七一五番





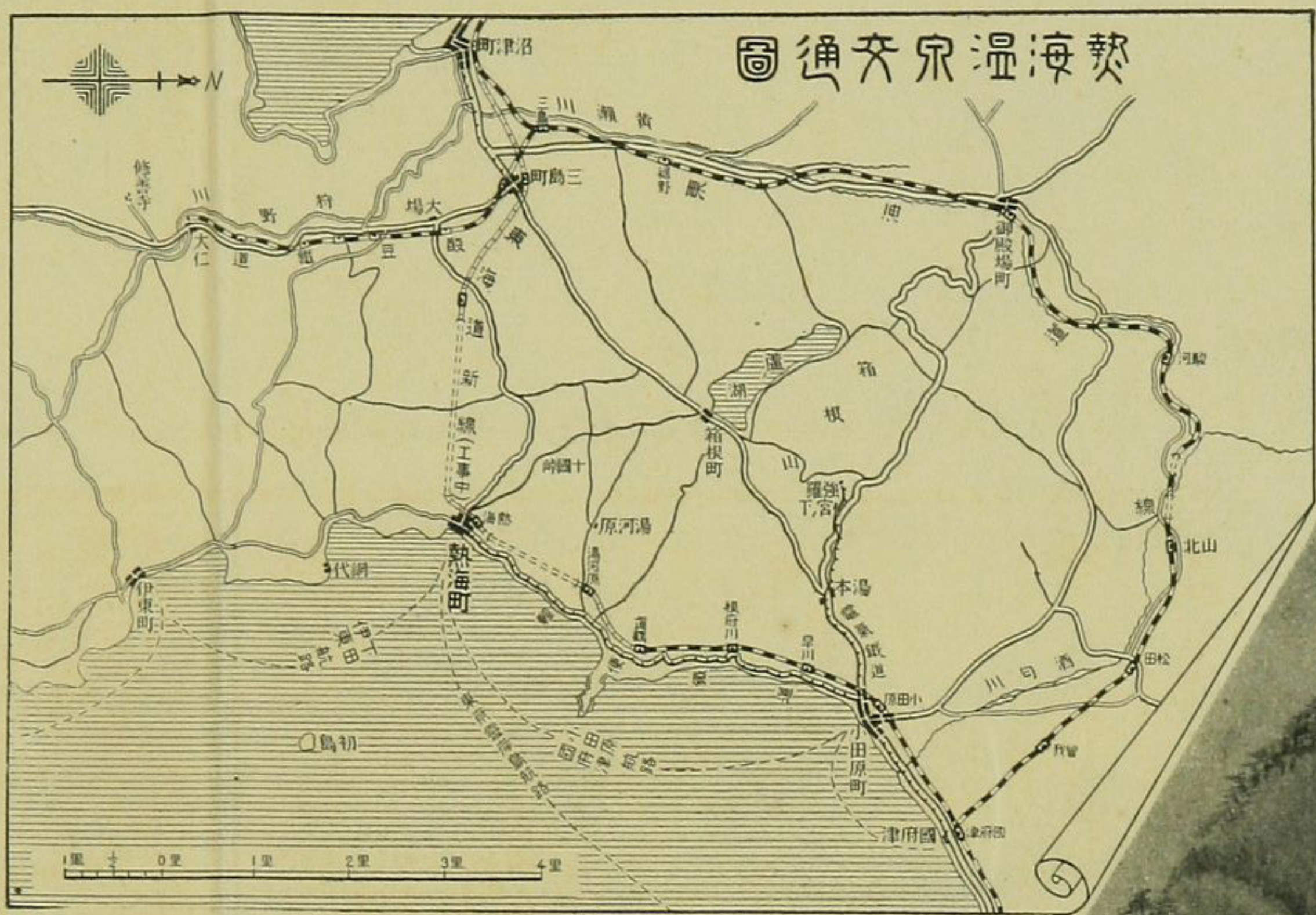
旅館所在町名  
 本町  
 熱海温泉取所 番十二番  
 王又旅館 番廿二番  
 鈴木屋旅館 番廿番  
 富士屋旅館 番廿番  
 横町











版權  
所有

大正三年八月廿七日印  
大正三年九月一日發行  
大正六年八月十五日訂正再版  
大正八年十二月一日訂正再版  
大正十二年一月廿日訂正四版



靜岡縣田方郡熱海町熱海百七十九番地  
著者兼發行者 熱海温泉場取締所  
特設電話熱海十二番

全縣全郡全町全所四百三十九番地  
代表者 梅原音松  
全縣全郡全町全所二百七十六番地  
訂正代表者 内田市郎左衛門

東京市神田區錦町三丁目廿三番地  
印刷者 菅野久  
電話東京神田三七一五番

所刷印版製真寫堂山群地番三廿目丁三町錦區田市京東所刷印

增設寫真場屋  
料理店 十又し 全五百廿番  
牛 乳下 田 全五百廿番  
五 突池 田  
寓 真今 井 全五百廿番  
料理店 才 代 全十八番  
料理店 翠光園 全百番  
喜 樂板 垣  
新橋町  
吳服店 青 木 全四十番  
清水町  
熱海温泉場 布 全四百廿番  
熱海精米株式會社 全一六七番  
牛 乳 青木精米會社 全百廿番  
醫院 所在  
坂町福地醫院 全四十四番  
新橋町門田醫院 全十五番  
同 山田醫院 全十九番  
清町庄野醫院 全五十七番  
上宿山形醫院 全百七番  
東町菅沼醫院 全二〇五番

四景全景

みる大湯が割しく全出しと構内の丸松三四を皆  
枯槁し比今後熱海港を編み添するものも北寄の夏巻  
を扱すも要がある今有海内に伴いんと被るもの出  
あちちこちと日時取回つて見れば、絶甲索と云ふん錦  
が浦の巻も大分崩れしといふ風致を扱してみる魚  
見島の鼻作もある二個の風致ある巻も海内のも  
みの上頭を矢くを早稲上のおねも七をや見ることもか  
来ぬ長く知る此地の被る巻を見ても惆悵の感も  
キ能いおむ、市中らも四年出版の巻も熱海の細目  
を求めお返しに被る巻の巻も巻を入れたつて即ち  
左に収めるものかといふある巻も海内のも被る巻を  
系するもの、黄巻も石垣土着其他の被る巻を系す

このてある

○十才の相好の方を解し山嶽に三時に出七直ま歸東京縁  
定てありながら山中に氣が變つて修善寺に回ること二つに  
此頃の地震で東京の宅七心元さい感じ七才が、喜氣の岩を  
ると思ふと曲るのが感もろろ、折角眼前に修善寺温泉  
を思ふと、之れは皆く七何とろろ氣が満ちたり、まふい遊思  
七畫無きぬの二強を急ぐべきも七あかすと終に修善寺  
る主宮のることろ、此年雷火の前の娘をつれ七四五  
日、一才の時々二流の石に泊り七かを七反を七菊屋に  
投じ七獨り旅を興かまのけん七、獨生閑寂を味  
ふの七亦一興七あり、朝又七つと修善寺の梵鐘を七又七澄  
きし、時々七出ろ七溪流を七目賞し、七借七んと酒を

命して飲み、毒の浴し或は後と聴く、如客も七  
無聊を歎せ七

此年の雷火後、海への途、海路を伝るの  
方法を七以て、彼地へ行くべき客多く七此地に移り  
一層殷賑の觀あり、旅客の要する品物を七彼  
れに無く七七此處に備ふるものろろあり、七海  
より西洋の物等を得んと七終に平入ら七  
い、七埃及の物等をアメリカ物等スリーカッスル  
れきとのあり、七物等を七舟等の用は七是の七絶  
無り七あり、現に一二立あり七ものを購ひ得たり  
時夏の宿災七比を微弱ろろし七故に七被  
害の七然とろろし、この七地震も七格ある七感七

さうし換子也

散葉中一燐ひ得る一玉と山川均か得しは植物  
の心である原若り凡、H、フランスの若くは植物も人  
間同様の無縁あることを尚ほ説きなすものさう  
外は華や紙と糖の華と此地と産する萩を  
軸に用えあり又いばを軸としたりもあつて脚  
筋もあつて紙は大豆の屑悪るのがある、木村  
皮の汁と顔料ととよめ、風味があるか  
遠く遠くことさうし用ひるもの、外はさういふ此の顔  
料を以つて上等の紙を製しとさうおこしあ  
わのが出来るひあさういふ、用ひるとさういふ硬  
さうする氣味がある、

浴衣、人間の赤條の状殊に裸婦人の状を見るは淫  
坊の一興とさふべきに、志うし隣室に荒い男女  
が秘戯を志むるさういふと如客を取つてさう  
さう御難ひある

○前掲山川均の得る植物之心と通讀し以て近世科学の研  
究と進み植物に及んば是と神祕を察せ、動物の心  
あるとさういふ法も能く植物の心あり、感覚もあつて味も  
聴感もある神性もある植物もあると云ふもの、此の點を  
尚研究する所、精確な断言は出来ぬものがある  
さういふ植物の心あることさういふも進みさういふ  
もの、此の心をもさういふ、略叙して後述論するは植物  
さう動物と異なす所があるといふこと、生物はさういふ

同じ換るものか、ひとり人間か、うきもの霊と云ふて感化  
る得るやうぬ、況んや其の人間の中にも等級を設けて  
貴族と凡庸貴族と云ふ別を差おを立つるを思は  
ることも、と云ふも此書と窮竟平等を主張して  
ある其の依論中云く

自然に成るて生命を造るものなるけん、急て精神  
を吹き込まざるものなるべし、吾々人間の霊ある植物も、  
之を吹き込んたものも神も、も要ある、生  
存の必要ある生活の状態が、吾々人間には霊の  
又精神と自覚とを興く、植物も、人間等を云及  
と反射作用とを興へたものある、吾々の精神が植物  
のうちに眠つて居るもの、植物の精神が吾々のうち

うきと目醒めて働らつて居る、同じ流き植物の力が  
之を放て人間の精神も、収らんば一茎の野花を  
育るものある、バクテリアの如き下等なる植物も、若  
物の霊者と稱する人間を、スラリと並べて思ふに  
此の驚くべきお、世間の世間の世間の世間の世間の世  
間の程度の異なるものある、吾々のする不測のことハ  
バクテリアやも或る形、或る程度なる程を行つてある、  
若物の霊者の為するところも、其のバクテリアの如  
きところを、進んで思へしめ、ある、此のお  
異を心つたものも、神ひと云ふて自然に、ある、生  
存の必要ある、バクテリアやうきもの、ある、無  
数の植物の、  
即生況状態のお異を、表はし、と云ふものある、吾々を

構造してある細胞と称する流きに物質は回しく  
植物を造つて居る、之を生るの必要と云ふ定其の  
ルハ固くもるんハ四角にカキのハある

之は人等社会に於て限つて見ても同じことであつて若  
吾と植物と云ふ物に掛けたらぬ比較するハ人  
等と云ふ特別を一階級のようにな思ふハ人等仲  
間だけを観察するようでは丁度植物と人等との  
間にあるお異が、又殊人間同士の間にある生活  
の必要に同じ細胞を人等と植物とに造つた分けが  
其同じ生活の必要が、人間を泥棒と盗民とに造り  
分けて居るハ、或る人々を盗民と盗民とに造り  
流の道を與へぬ社会ハ、人等も盗民と盗民とに造り  
十二

キカも有る事、又他人の労働を搾取して、安楽な者  
々々を模倣する世の中、丁度寄生動物が寄  
せりして他の植物の滋養を命を吸ふやうに労働者  
の血を吸ふ社会の一階級が、其の毒を、腹が空け  
バ泥棒と云う、胃の腑が充ちんハ高座の上の現  
流もする、生活の條件ハ生活の形式を決定する  
之が植物も人も人等も、均しく支配してある法則を  
のびある

コンナ流も社会主義の根柢をなすものがある  
○パトリックの弛緩心理論の流論、人と平和をぬむ  
もの、ひまき、草花、草花をぬむもの、ひまき、草花  
う祖先の野蠻性が貴い、偽りしてあると説き、此の

世界の大事をもコンナ理想から見てみる人其の平和  
を以て第一例として挙げられてゐる實例を見るに米を  
の某大卒の教授が、理想的の平和村を出しつけし、  
そこを住居を試みれば、何事も補ひてゐる、亦不自由  
もさういへば階級もさういへば窮乏もさういへば飽きり理  
想的に出来てゐる、平和村の花は皆うさぎのからで  
無事神仙と云ふこと、これを報人等の住居と云ふ  
また、人間も故り変化の波瀾もさういへば味も其  
感もさういへば退屈が皆して連も長く留まり  
て居た、アコナ宮と其平、神鬼と其の道け出し、以と  
さういへば實があつてゐる、目するに主義あるものか、その  
空想と實現したと云ふと、恰もコンナ換るもの心

ハあるよいか

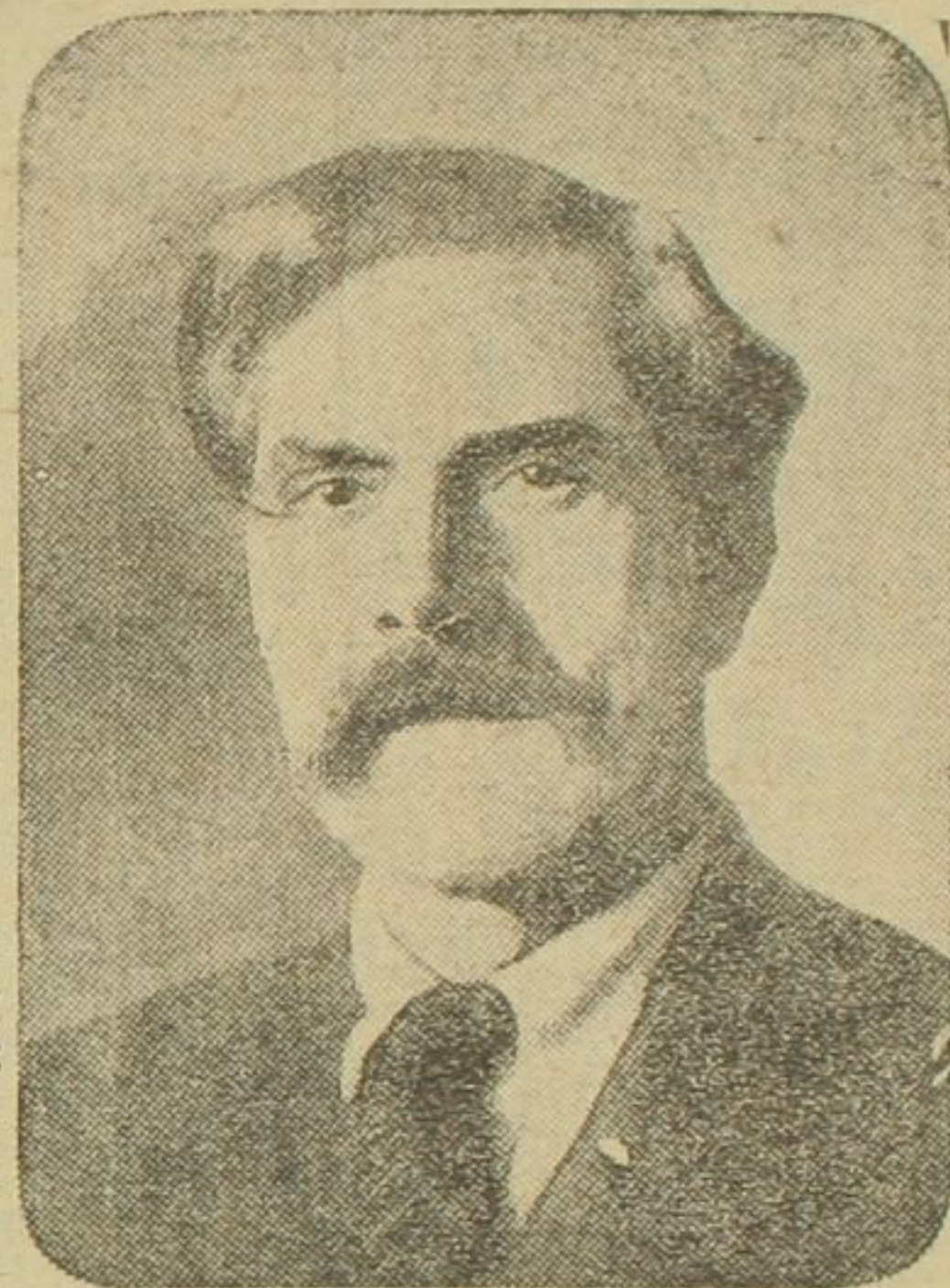
以上十五枚修善寺滞在二日

間無聊を感えんと折角修善寺の宿を尋ねし大仁翁  
○年ある僧と折角修善寺の宿を尋ねし大仁翁  
いかに驛心切符を度ふことが後慢心あつたため自分切  
符を買ひ得たが、電車を走し、仕事あつたので、寧ろ茶  
二二時間待つことゝなると、此間半帳といふく、のろを有き  
ついで七時を移し、その半帳から今一二をこゝに、字を  
おく、

日本は時勢に不似合の清海内各が出来たと、現と同時、  
英國は之を備へ、軍が旅を制して今も其を首領が  
内閣を指導するものと、めあ、お此ひある、傷と茶を  
買つた、此の如き、此の如き、英國の横例

# 女中の子が天下取り

## 組閣の準備に忙しいマクドナルド氏 憲政の本場が日本をお手本に



安協の常識の國であること  
定評のある英國では此度保守黨の  
内閣の下で行はれた總選挙にも  
拘はらず矢張り時勢の力によつて  
既々勢ひを得て来た労働黨が空前  
の多數議員を當選させボンドフキ  
ールド、ローレンス、ジワソンの

三婦人 議員まで立派に  
議席を獲得したので保守自由立二黨  
の間へ労働黨がダイと頭を擡げ現  
政府の保守黨政府の議員より反  
對黨の自由黨と労働黨が合すれば  
過半数となつたのでボンドフキは  
牛命とする國柄だけあつてポルド  
ニイ、ウエツア氏を植相にする  
心細い 説明をした位で  
ある今迄選挙権裡に際者をつれて  
電光石火の様に働いた労働黨總理  
のマクドナルド氏の努力も斯して  
報いられた英國に始ての労働黨内閣  
は今期して出来上らうとしてある  
下女の私生児として生れて今は隆  
々たる勢のマ氏が「何時でも廿  
四時間内に内閣を組織して見せ  
る」と今から豪語して居る丈あつ  
て一般的にも労働黨内閣の成立は  
確實と見られてゐるが此「我等天  
下を攝らば世界の職權去らん」と  
云ふ素直しい内閣にも 植相と  
暗礁は ある海陸兩相と  
植相大臣は元來が軍國的なもの丈  
に労働黨には適當な人がないシド  
かトマス 鐵道組合長を陸相にする  
さか大蔵の目録はついたが投票國  
の憲法によること上院には上院議員  
でないも出席が出来ないので貴族  
のない労働黨の大臣は貴族院に出  
席して施政方針も述べられなければ  
は議員の質問に答へることも出来  
ない社會主義の第二第三のインタ  
ーナショナルの大會に出席するの  
と異つて  
いくら 社會主義の内閣  
でもさう勝手に法律や慣例を破る  
わけには行かぬそれで今ウエツア  
氏を上院議員にするさか日本の例  
に倣つて大臣は上院に出席が出来  
る様にしようさか政治家の間に盛  
に論議されてゐるが今迄いつも例  
に採られた立憲の先進國が此度は  
國務大臣は上院に出席が出来ると  
いふ日本の例によることになれば吾  
國は最も立憲制の先進國となるで  
あらうさ英國では論議されてゐる  
これで四年前に英君を失つて以來  
淋しい家庭に今迄労働黨問題だけ考  
へてゐたマ氏は二人の令息と三人  
の令嬢に圍まれて此頃は組織と施  
政方針の話ばかりしてゐるさいふ  
（寫眞ラムシー、マクドナルド氏）

とてこれ以上上流に激進をなすものか首領もさう  
測りもなつて来た此の比からなると激進をなす  
而して激進をなす比からなると上流に激進をなす  
比から、労働黨を天下を取つても上流に激進をなす  
の税めさう出来ぬと云ふぬるハメに陥らぬのを  
也、  
清浦内閣をなすも誰かが後けるものかと思つてある  
改進黨が分裂して後けるものかあるか、花田未比呂の  
宣言に據つては非改進黨改進黨の内閣を援助する  
のが改進黨の従来の歴史に、さういふ穩當の道に  
と云ふしもあるさういふ正氣の沙汰にさういふ  
熱海から前山、激進をなす大場をなす途中、熱海の



内や馬車の中を感し比ことの一ツある。海の梅子道を  
段々上へ上へと登つて行くと四方山々圍まりて天地の清  
寂を感する所がある。夜分を過ぎ物すこいほど閑静に  
あらうか志し地震氣分の離れ切ぬぬ自人の感しを云  
ふと山々黙しておるをいふわりの山々動ぬぬとさるわりの山  
迄七三四の筋うらうら動揺し比の山々も動揺の際を  
土を飛ばして濤い騒を感し比の山々も動揺の際を  
和比の山々も動揺の際を感し比の山々も動揺の際を  
筋を放つて運動する。比の山々も動揺の際を感し比の山  
々登りつめと富士山を行きの真一面に望む。層層望む  
廣闊の地も出で、天半の屹まする比の大火山を望み、  
比前こゝを通つ比時の絶景と感し比の山々も動揺の際を  
十二

ハ地震氣分が纏綿し比の山々も動揺の際を感し比の山  
か比つ比十五の地震の深地を丹波山であるといふが、  
此富士山とこの山を遠く眺むと多分微笑を感し比の山  
う、比の山々も動揺の際を感し比の山々も動揺の際を  
の真似をやつ比か、まじく年が危うい、ウント然と比の  
人から、火も噴き出し得ず、比の山々も動揺の際を感し比の  
いしじやるういか、とコシナ感志を拂ふし得るうつ比  
軽井沢に自動車に乗るのを待つか待遠しく、乗人  
馬車を借り切つて乗つて又比所が、途上、バラスが堆  
積して土に親しめん所を行くかあるから、車中の自分  
を顛倒の状態に、宛から大地震の時察察とあるが、比  
き思ふと、甲午金剛七つ、大地震を感し比の山



此如進に富貴をきりて来比に多英名のかく變化の生  
いかにある、其批評家の言ふことごとく、野舟と云ふの字  
實にのき纏ふ一現象たる(きぬ)と思ひ、一月廿三日

○此の神田の墨店一二を訪ふと、表子の施をを得たり、  
ハコケルも一二をえり

一 横鏡秘訣

一帖

此の墨帖池大雅霞推の事、成る文化八年  
京都出陣林まぢ兵衛の足行す、霞推  
印字行の墨本、巻末、井上柯亭の跋  
を刻す、柯亭の父執中河某公を大雅に  
習ひ、人不知の者とも、刻し、

り余近年多く日本名家の墨帖を蒐集す、而し  
その中の宝目す乃ち精めて集す、

一 分出記

上下合冊

此の度、四辛卯孟春吉辰の刊年と巻尾  
に刻す、古書を刻し、

一 櫻花百絶

一冊

此の尾張の中野季又の著す所、天明三年  
京都に於て刊す、櫻花百絶之れを唱首  
とす、岡田挺之の序あり、

一 中興福井風月集

陸ヶ合二冊

宋代福井大家の詩を編集す、細注あり

寛永十七年京都に刻す、稀本也

一 康熙字典考異正誤 二冊

康熙字典ハ校正者多しと引用の  
典考考引るるが為往々誤謬ある  
こと多し人の知る也支那人も改之を  
を知らざるも此書を工部に授り書  
輯し給ふものなり故に清人といふ  
を知らざるを得ずとも我邦に往々一  
二原書に溯つて對校し給ふ人あり其繁  
綴も訂正者の子を記し給ふ今其の  
名及の流以後訂正者を流部強とす  
す此人の訂正し給ふ康熙字典刊行す

こ況に流布す余の得ざる訂正考異  
のみを原書輯して二冊とす  
正誤の數四千餘考異二千に及ぶ

一 飲食短歌合 二冊

六折園社中の短歌を考へその判者六折園  
より飲食を題してなる下は後味あり

一月廿四日記

○中村敬守の遺印を考へるものあり俗にも價の  
ふ廉く物も賤つて架中名家印を加ふ林岫山  
每款、可亭の刻をいふ



心直

御徳をば一生の由をありて若菜の印と支那と傳へ  
べきよるを其の印講松石山印講古日本室前の  
奴印講と有すべきことありて、其の選の精る上は松石  
又其部教の大方に上は松石、而して此の印を此部  
の香火にききしや、他人の花をききし、其の氣  
をありて志むく人、其の氣、ことありしが、其の氣  
心御徳と此の印を流所の番書に持ち行きしもの

卷に置きし、以て全減し、其の支きし、其の支  
度、打此ん、印の味、其の味、其の味、其の味、  
之れを、其の味、其の味、其の味、其の味、  
え、其の味、其の味、其の味、其の味、  
其の味、其の味、其の味、其の味、  
印の支、其の味、其の味、其の味、  
其の味、其の味、其の味、其の味、

○廿四日、其の味、其の味、其の味、其の味、  
其の味、其の味、其の味、其の味、

一、其の味、其の味、其の味、其の味、

二、其の味、其の味、其の味、其の味、

此の味、其の味、其の味、其の味、  
其の味、其の味、其の味、其の味、

物部江あつ後もよく在るに古歌丸の跋の  
ゆゑなり

何れも時いどみかひり一光源氏物語を  
寛弘のけしき見出ましかるも万平年中  
埋れて康和の改らう世上の寶とる人々比  
つれくもも天正の改まるとを思ふ人も  
まんごうしんが昔もあゆめと廿二かえあつ  
ふることなり云々

一 田元大師勅修條

大正 二十五年

後伏見上皇<sup>皇</sup>の勅修り傳りあゆめのみ條に文を  
綴らむと書しを昔もえんはる原本修りせむと  
云ふも一うらそのことと明りしはるまの乃ち

此方より、原本と勅修恩院にあり利本と多麻  
寺にありと云ふ、此のまを字、教ととらる  
七美術の美を云ふと今も元二のま也  
ゆゑ廿四巻のみに此宗流の持志者此を  
傍利利行しなむもの多く世に流布すんも此  
本と元祿の刻し傳り今も稀觀のものあり  
す、傍七のうとと云ふものありしが、今も美  
術の資料として画家をててえやすること、さう  
いふは價ハ騰昂なり、此方と廿七のうと  
入んは但し原本也

原本修り傳りし四十巻なり、後伏見上皇  
二條帝伏見法皇尊田法親王の筆なり

卷中入あり、元禄十三年の跋に洛北報恩寺  
前住古爾斎とあり、此人畫を跋すしとあり  
見ゆ目錄二卷を享保二年刊とあり

○盜紙希業集二卷を田中長美の複製と傳ふ電  
尖前にも得たありしとあり、今復たすましく得難  
かんと思ひ婦人入の、盜紙希業集と之をす所  
用紙希業集の名を帯ふか所也、もと古末公任  
と傳ふ公任の傳も一古末名業集に公任の部と  
為盜紙集異名あり、古末を言し其由を  
考へしあり、或る處に、複製の上より古末の傳の變  
する中、印んを、古末の部の中にも、ことと外れ

今の希業集の古末の傳、古末のものと伝ふ古末  
時代に属し其以前のものとあり、此書集七共一とあり、  
此二書の内一と古末九と一と古末十とあり、而して  
二書はと切なくとあり、あつらふところらう、教じ、原書  
即期、田中、<sup>註</sup>、(古末)等、うも、花、や、む、  
漢、ま、ら、ら、古末、花、の、古末、とあり、此二本、複製、  
の、古末、木、弘、隆、を、解、題、を、ゆ、り、し、此、古末、に、附、し、  
る、内、公任、の、名、に、就、し、希業、集、を、か、く、う、と、傳、動、は、  
た、も、あ、り、と、評、し、た、ら、む、古末、吾、意、を、得、  
たり、  
一月廿四日記  
○熱海にけきし、洛北報恩寺、庭の邊に、古末、とあり、三  
友、比、念、とあり、撮、り、取、り、し、三、行、の、古末、とあり、

すまふあはれ道にうきまふに数首の和歌を思ひ  
あ

外よりそと乾うらさせむ四十あまきう

八とせ添ひあふ三つの日影をも

まみればあいつともなるし志持の

影をいそふとせととりていぬ友

冬去りて人目うらぬる山ありも

君を仰つくしまめきまけう

あふしまうけらまし宿あるあつり何れこき

冬ののよとを君をもてさむ

わいへんを山の庵なんばあはれよけむ

うよけあちあふかおあつりけむ

け子算端 せうえう

別に半切の以上の和歌をうき外にたの和歌  
をもあけり

志のすけりあさいけり君もあひも

さき若しうらうらむも

誘えあありしあめしを替のこそめ

たいくさうか今踏りたる

おいぬねをかくと伏里の木とあえと

おひし人の雨乾うらむ

渡押舎のあ



遊遊の公簡の事

此れはいつかもうよおぬくを何れう  
お芝らぬ心地いさし、が併あえお  
揃ひあし、いさし、この記念の合を  
とり、黄、其、他、念、字、其、と、芝、根、の、事  
合、あ、し、く、て、不、出、来、と、さ、う、さ、う、揃、ひ、  
望、し、例、の、あ、さ、む、け、り、の、腰、お  
字、其、の、端、ま、あ、け、し、い、お、泣、又、さ、う、し、が  
あ、え、も、大、分、着、く、う、り、し、わ、さ、心、配  
と、ま、と、ず、さ、ん、ば、と、を、捲、き、さ、う、さ、う、あ、つ、  
も、さ、す、か、さ、る、心、地、い、さ、し、お、切、  
、傳、の、結、句、と、さ、ま、あ、き、さ、さ、ん、、ア、一、笑

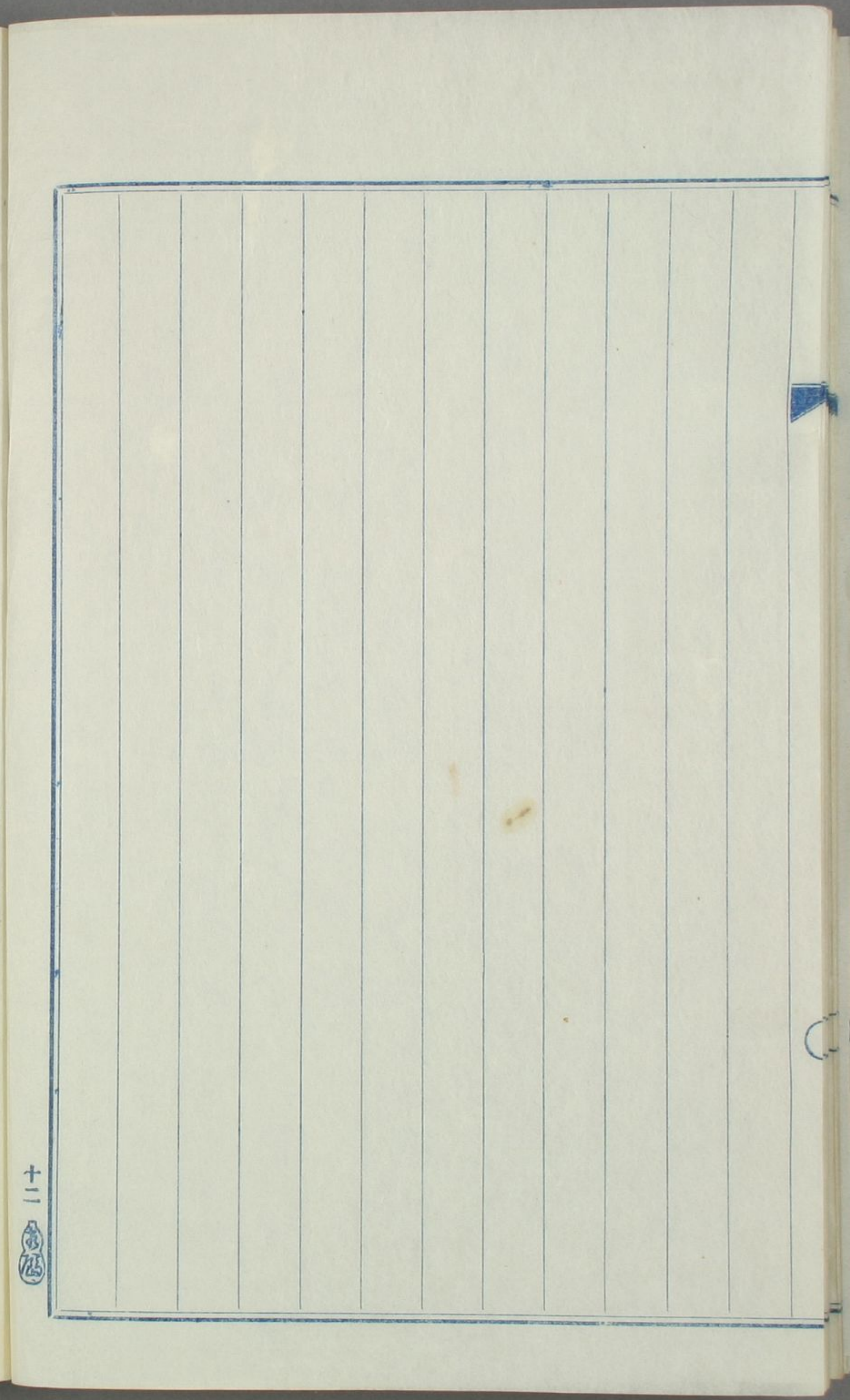
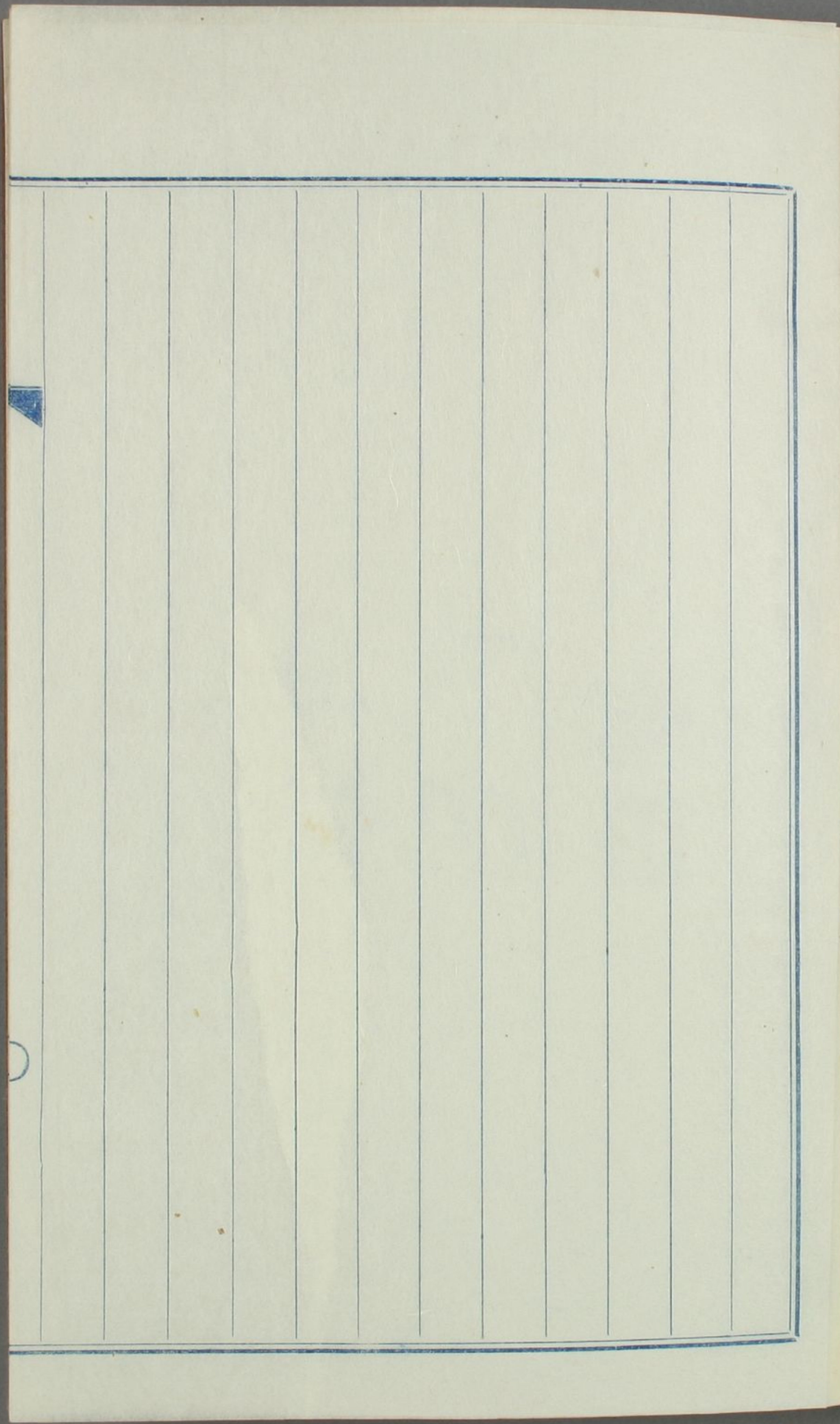
「わいへん」とは、は、し、り、ま、も、も、さ、う、さ、く、道

馬の事

我家は戸ばり帳も紐けり、  
大君来ませ、舞、舞、舞、中、者、  
何、よ、け、ん、あ、さ、む、  
入、目、を、見、さ、う、け、う、と、  
リ、二、修

と、あ、此、中、切、と、志、替、し、と、家、に、係、あ、ち、ん、敷

一月廿六日、東宮御成婚の日



以下  
3丁  
白紙

小精大隈會館

